

目 次

- 万国博の歴史的変遷…………… 1
- モントリオール EXPO '67…………… 4
- EXPO '70 PRについて …………… 6
- デザイン資料
インテリア空間における
行動の研究…………… 7
- 会員近況……………14
- 賛助会員紹介……………15
- 新入会員紹介……………16
- '67 日本輸出デザイン展をみて ……17
- 自動車のデザイン展をみて…………17
- JFC開館される……………18
- JFC特別展に出品して ……………20



No. 31

THE JAPAN INTERIOR DESIGNERS' ASSOCIATION

万国博の歴史的変遷

万国博はあと1,000日——あと900日——こんな時間との戦いをムードにおきかえてしまう行為。

万国博のテーマ決定時の組織と人材とが簡単になってしまう行為。

猫も杓子もモントリオール参り、議員さんは国費便乗で何を見てくるのやら。

そして日本館は悪い、『ツウ・コマーシャルすぎる、もっとあそびがあり文化的であるべきだ』と、いう文化人と称する人々の批判。

日本館不評のため佐藤首相はゴキゲン斜めで早速実情調査をさせ『スイスは時計、イタリアは自動車を出品していた、故に日本の見本市的展示は問題にならない』『日本人が悪口をオーバーに言っているだけだ』等々、通産省の役人の主観的説明ですべての問題がチョン。

私達はこれらの問題をどのようにとらえ、どのように解釈すべきか、無計画無秩序そして現象的・刹那的・主観

的批判と行動、これで EXPO '70 が日本でできるのだろうか。

そこで最も素朴な疑問にたちかえり、万国博とははたして何を目的に何のために開催するのか、歴史的立場に立って考えてみたい。

人類の歴史と共に歩む万国博

万国博覧会の本質は、時代と共に変りはしたが2世紀以上も続き、拡大・発展しその時代の要求に応じたものとして、新しい技術を受入れ、いつもその時々の人類の問題意識にこたえてきた。

ヨーロッパの万国博研究家は博覧会の本質は「販売を目的にしない展示だ」としている。この歴史的観察はヨーロッパでは、旧約聖書のペルシャのアハシュロス王が、その宮殿で数々の秘宝を公開し観をきわめたとされ、これが世界最古の博覧会と記録されている。

東洋においても隋の煬帝が大業年間に洛陽で諸国の使節たちの観待に、珍品貴宝を展示した。おそらく聖徳太子もこれを観覧したであろうといわれている。

このように自然発生的におこなわれ

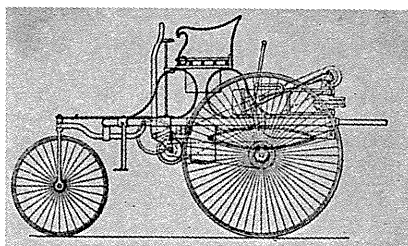
た博覧会は、もっとも素朴な好奇心と交流を楽しみ、かつ喜ぶ最も基本的なものであろう。

第一回ロンドン万国博とイギリス芸術協会のはたらき

• 初の万国博は1851年（嘉永4年）ロンドンで開催された。

この博覧会がおこなわれるまでにはイギリスの産業革命を中心に数々の発明がなされ、国として「産業技術の振興」を促進させるため芸術協会が優秀品を買いとり公開展示したのが1762年で、これが近代博覧会の始まりといわれている。2世紀以前から芸術協会が存在し、それが国家的立場において産業振興に協力していた点、私達にとって驚異といえよう。

このような歴史的背景により、当時



ベンツ三輪車1893年シカゴ万博



1853年ニューヨーク万博の水昌宮

のガラス産業発展の象徴としてのクリスタル・パレス（水昌宮殿）は梁間22mのガラスと鉄の構造で建設され、万国博の第一歩を踏みだした。

●1853年（嘉永6年）ニューヨーク万国博はロンドン博の感銘を受け開かれた。

●1855年（安政2年）パリ万国博はナポレオン三世が指導推進したため、経済的要素が強くなりすぎた。

●1862年（文久2年）ロンドン万国博に始めて日本人・竹内下野守が観覧し『あまりにも日本と差のあるヨーロッパ』とその工業力に驚嘆した。

日本一ハオリハカマの初参加

●1867年（慶応3年）パリ万国博、当時の日本の歴史はテレビドラマの三姉妹時代で、薩摩藩が参加を決め、その代表者名は「琉球国大隅国・松平修理大夫源茂久総理殿下」とまるで独立国の代表のごとく名のつたといわれている。

薩摩藩の刺激で佐賀・鍋島藩も参加し、対抗上、徳川幕府も将軍・慶喜の弟徳川尼部大輔昭武をパリに派遣した。

万国博のかくれたテーマは「人類労働、技術さらに社会道徳」であったが、日本の出品物は“お国名物”の産物を列べた程度で、世界の思惟ある文化的流れと今昔共々変りばえない点が注目され、EXPO '70では「おらが藩」「おらが会社」という縄ばり的考えはぜひ戒めるべき点と思う。

日本政府の初参加

●1873年（明治6年）ウイン万国博に日本政府として、驚額60万円を投じて初参加した。（米一石3円当時、現在

では10～15億円）

日本館の建設は白木の鳥居・太樹橋そして日本庭園を造り、ヨーロッパ人にはエキゾチックなムードを感じさせ驚嘆させた。

●1876年（明治9年）フィラデルフィア万国博はアメリカが独立宣言を行なった地であり、アメリカ独立100年を向えた年でもある。そして「ヨーロッパに負けるな」の合言葉で、ベルの電話・エジソンの電信機などが公開され文明の源流展といわれている。

日本は40万の建設費をかけ参加したが、2階建の一風変わった日本建築を作り万国博に参加する意義に、喜びを感じていた時代である。

産業技術と芸術の結びつき

19世紀末期の万国博は世界の動きと産業技術がいちぢるしく発展した時期である。

●1878年（明治11年）パリ万国博は普法戦争の敗北から立直ったフランスで行なわれた。

●1879年（明治12年）シドニ万国博はオーストラリアで始めて開かれた。そして翌年同国のメルボルンでも万国博

が行なわれた。

●1881年（明治14年）ベルギーのリエージュ万国博、そしてその後5年間にヨーロッパ25カ所で次々に小規模な万国博が開かれた。

●1889年（明治22年）のパリー万国博は建築技術の象徴である「エッフェル塔」が出た年であり、デュテルとコンターマンの設計した機械館もこれに匹敵するほど評判が高かった。

●1890年（明治23年）～97年までのあいだ、各国で開催されエジソンの活動写真・X線などが発見されたが、世界の雲行きは段々とあやしくなり各国軍備拡大の方向に進んでいた。

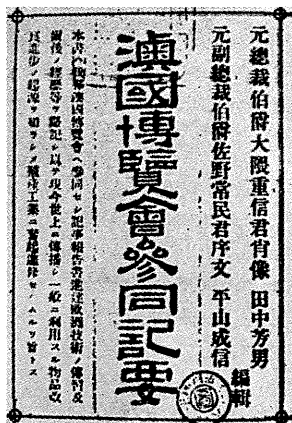
●1900年（明治33年）パリ万国博は19世紀最後を記念するものであり19世紀万国博総決算と20世紀への願いをこめたものであった。一方ウィーン万国博の影響で生まれた「セセッション運動」が新しい形式に変わり、この時代はアールヌーヴォーの芸術が潮流となり産業技術とデザインとを結合させる学問が開き、今日のインダストリアル・デザインの基礎を作った。

戦争＜建設の道標＞戦争

20世紀はめまぐるしい程、全ての移り変わりがはげしかった。そして第2次大戦を中心に前期・後期に分けることができる。

●1904年（明治37年）セントルイス万国博の年に日露戦争が始まり、ロシアは戦争を理由に参加しなかったが、日本は戦費に苦しみながら82万円の大金を投じ参加した。しかし出来上ったものは藤原時代の寝殿造りの展示館と金閣寺で、江戸っ子のからいばり的な感じがする。

この万国博はヨーロッパ旧大陸に対抗するアメリカ新大陸の実力を示そう



1873年ウィーン万博に日本初参加の報告書（日本館入）

とし、会場は今までのものより数倍広く、フォード社の初期のT型自動車を中心に誇りある産業製品を展示した。

特にこの時代の特徴は職工としての認識から、新しい産業のささえ手としての労働者階層が社会に台頭した。

●1905年にベルギーのリエージュで初の万国博が開かれ、1909年シアトル万国博、そして1915年（大正4年）パナマ運河開通記念にパナマ太平洋万国博が開かれ、またも日本は金閣寺を模したパビリオンを建設した。

●1926年（大正15年）フィラデルフィア万国博はアメリカ独立150年を記念したものである。ヨーロッパは第一次大戦の被害で荒廃し、随所でストライキが起りイギリスでは400万人が参加する空前の大ストライキがあった。その半面アメリカは戦争景気も手伝い目ざましい経済成長にわきたっていた。

日本の出品物で彼等を驚かしたものは養殖真珠で作った五重塔で、当時の価格で70万円かけたといわれている。

初の公式テーマ決る

●1933年（昭和8年）シカゴ万国博は初の公式テーマ「進歩と世紀」が決ったが、その準備中アメリカ株式が暴落し世界の経済は大恐慌が起った。このような状況で何が「進歩の一世紀」か世界の人々は複雑な気持ちをもって万国博を向えた。（ヒットラー内閣成立、日本国際連盟から脱退）

しかしその半面近代建築は目ざましい発展を示した、それは1917年社会革命に成功したソ連の構成主義に大なり小なり影響を受け、オランダのデ・スティーール、ドイツのバウハウス、フランスのピューリズムの三つの運動が中心となり、構成的近代建築の形式が成立した。当時グロピウスがバウハウスの叢書第一号に書いたものが国際的建築の思想となっている。＜建築は常に民族的であり、また個人的であるが、しかし個人・民族・人類の三つの同心円のうちの、最後の最も大きな円が他の二つを内包している＞

万国博会場もこの時代に適合し、12本の鉄塔で屋根を吊り上げた交通館、U型の科学館、明日の家をテーマにしたガラスの家、そこに日本館は2階建・書院造りという珍奇なものを持ち込む神経は……………。

●1935年（昭和10年）ブリュッセル万

国博とサンチャゴで小規模なものが開催された。（イタリア・エチオピア戦争始まる）

●1937年（昭和12年）パリ万国博は第二次大戦前ヨーロッパでの最後の万国博であった。政情はドイツを中心に暗黒化し、平和を愛する人々の間に万国博を通じ、文化と芸術の盛り上りを求め、ファシストに対抗するための呼びかけとしたテーマ「近代生活における芸術と技術」は当然であったろう。

有名なピカソの「怒りの絵」もこの時作られたもので、彼がスペインの町ゲルニカでファシストの暴行事件に怒りを感じ筆を取ったのが「ゲルニカ」と題する作品であり、今はアメリカに保存されている。

日本館はまたも日本風の建物を作り、東洋のエキゾチックなムードを文明国に感じさせようと計画したが、戦費におわれ資金の欠乏のため、その計画を断念し、その変り留学中の坂倉準三氏に依頼したところ日本調に反し近代建築が出来上り逆にグランプリを受けたという笑えないエピソードがある。（日支事変起る、国家総動員法成立、メーデー禁止）

第二次大戦始まる

・1939年（昭和14年）ニューヨーク万国博はドイツ軍がポーランドに侵入した直後で、日本も中国大陸のドロ沼に足を入れ、世界の希望は何もなかった時代で、独裁国ドイツは当然不参加、2年後敵国同士になる日本・イタリア・ソ連・イギリスなど全面戦争を前にあえて参加している。

万国博のテーマは「政治組織と生活の方法としてのデモクラシーの栄光を高める」サブテーマは「あすの世界」としたが混沌とした世界情勢の中では抽象的で力強さに欠けている感があった。しかしアメリカをクローズアップして見ればニューヨーク市が建設した高速道路、フォード館が作った新型自動車とその未来像を描く道路、GMが提供した理想の道は現在にのこした遺産といえよう。

日本はこのような近代思想の発展時にも、なおかつ、寝殿造りを模し「古さと新しさの溶け合い」と称し自己満足をしていた。

戦後—EXPO—'70

へのアプローチ

●1951年（昭和26年）戦後第一回ロン

ドンで開かれる予定の万国博は、東西冷戦の余波で国内博とされた。

●1958年ブリュッセル万国博のテーマ「科学文明とヒューマニズム」は戦争否定の考えから出たものと解釈される。また現在開かれているモントリオール万国博も、科学文明のせわしない世界で再び人間を人間として認めることを提案している。

モントリオールのテーマ「人間とその世界」の原語は「テル・デ・ゾーム」その言葉を造った人は、第2次大戦で戦死したフランスの哲学者・作家そして飛行家であったアントワヌ・ド・センテキズベルである。

彼はその思想の内に「人間であるということは、自己の献身を通じ、世界の建設に参与していると感ずることである」そして、このことは、環境は人間に影響し、人間はその環境を生かし改善し、またその環境で自己の望みを達成し発展することであるとのべている。モントリオール博はこの思想を具体化するため、サブテーマを人間と社会・人間と探検者・人間は生産者・人間は供給者とし、各テーマ館を建設し現在を見つめ反省し、未来に対しての挑戦をおこなった。それでは万国博の歴史的変遷の中から、日本ではどのような考えをもち、実行するかが問題である。

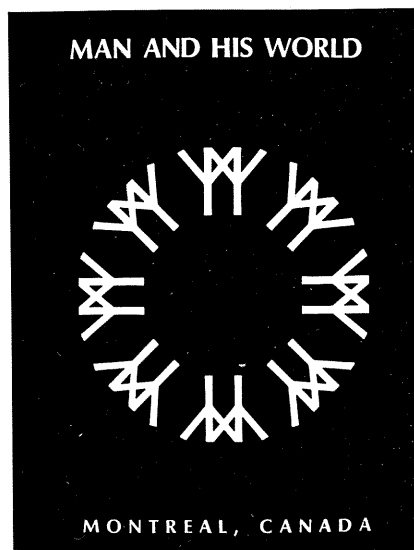
まず歴史の中から把握できることはすでに現在では産業技術と貿易振興だけの万国博ではなく、中心になるものは人類のための発展であるべきだと思うし、日本の万国博テーマも「人類の進歩と調和」とされている。

それでは人類の進歩の基本になるものは何か？ 答は素朴であるが人類の生存——平和の上になつての進歩であろう。ある人は「戦争によって科学技術は発展し、それが人類にプラスしている。ゆえに戦争は必要悪だ」もしこのような論理が万国博の進歩の解釈に少しでも入っていたとすると、2世紀にわたつての万国博に大きなしみを残すことになるだろう。

特に日本はアジア地域の先進国と称されている以上、世界の導火線的地域であるアジアを再認識し EXPO '70 の「人類の進歩と調和」を平和の上のみ存在することを万国博を通じ積極的に世界にうたえる必要があると思う。

（photo は毎日グラフより転載）

（竹内 篤）



カナダは決して特記すべき工業国ではない。電気産業、自動車工業その他の軽工業はアメリカに依存せざるを得ないほど米国の勢力が滲透しているのが実態である。広大な国土の大部分が山林、広野で最大の都市モントリオールでさえ220万（旧都市では120万）その他首都オタワ、トロントその他大都市といわれる数都市は40～20万程度、全国人口が僅か700万と聞くと日本人は誰でも驚かざるを得ない。このカナダが、よくもあの大規模の万博を成功させたものだといえながら彼らの努力と将来に対する希望に敬意を表せざるを得ない。

EXPO '67 は入場者3,500万人を予想したが会期半ばにしてこの数字に近い成績をあげ、10月末の終了までには5,000万に達するだろうといわれている。（予想はアメリカ56%, カナダ41%, その他3%）

この万博の内容については既に多くの報道がなされているので、ここでは省略させて貰うことにしたい。EXPO '67 を概観してまず気のつくことは会場が環境が実に当を得ているということである。街に近接したセントローレンス河をはさんで市の埠（400,623m²）公園を拡張したセント、ヘレナ島（1311,131m²）人口島で運河を造成したノートルダム島（1161,403m²）これを結ぶコンコルディア橋、宇宙歩道の全体計画と風景はまず申分がない。さらに街の中心部からの地下鉄、会場内に誘導する無料の高架のExpress会場を周遊観覧するミニレールなどの新しい交通施設は毎日の入場者25万を決して混乱に導かない。実に立派な計算で

ある。

（この地下鉄およびExpressの車両はジャコウス、S、ガイロン事務所の設計で実に軽快なそして万博入場者輸送列車らしい見事なデザインである。またバス——地下鉄の乗替切符のための扉の一時開閉、各駅ホームの色彩タイルの計画——一つ一つ別々にデザイナーが設計——などなかなかゆきとどいたスマートなものである。この会場はセントローレンス河があるため、そしてこの水を会場内に誘導して大池、運河をつくっているため大噴水、水上アトラクション、ゴンドラ、遊覧船遊びができて、会場に一層広々とし余裕をつくり、自然な雰囲気を与えて、25万人入場者にいい場を提供している。テーマ館、その他カナダ自国の諸館、外国館（62カ国参加、国際政府3、カナダ諸州10各市4、非営利機関7、カナダ企業55米州3）これら150の外に事務局インフォメーションその他がアレンジされているのだからいささか建築物の間隔が充分だとはいえず、むしろ混みすぎたきらいはあるが、何れも混乱することのない格調のある造形として気持ちいいものであった。特にカナダ側の建築は意識的にか余り色彩を使わずに清潔なそして品位のあるデザインで秩序と調和を生み出しているところはカナダの現代的なポリシーと見てよいのだろう。ラ・ロンドという夜2時まで開放されている遊びの場は主会場から2km程度離れて実に楽しい施設と造形物、色彩で計画され、食堂バー、売店、子供の遊び、アトラクションを行なっている。この距離上の計画

は実にスマートである。

◆建 築

カナダ自国の建築は評判の記念建築アビタ '67（3つのユニットボックスを重ねた住宅群塊）をはじめ何れも面白いものであるし、優れた建築家を最近輩出しているカナダの面目躍如たるものがあるが、何かしらあまりにも経費をかけすぎた感じがする。要するに内容とのバランスからも感じられることである。

しかしカナダ特産の鉄鋼、木材が特色ある構築に駆使されていて非常に興味を覚える。

外国館の中でアメリカ、ソ連、フランス、ドイツなど特に規模の大きなものであるが、アメリカのフーラードーム、ドイツの鋼線網張りの建築は特に興味深いものといえよう。ある意味でモントリオール博は建築と映画の博覧会ともいえるほど、経費、規模、技術をこらしていると人々はいふ。建築は万博の主要なエレメントであることに間違いはないが、これも内容とのバランスで建築にその技術や造形の進歩と感銘の焦点をしぼることはどんなものだろうといささかの疑念をもつ。

後進国の伝統的なスタイルのお国風建築もこのような雰囲気の中では立派に調和を保っている。例えば中国、メキシコ、タイ、エチオピア、チュニジア等々。さらに伝統の近代化をねらったものに日本、韓国、タイランドなどがある。ここにも面白い現象が感じられるのである。オリジナルに対する誇りとそして外から見たそれらに対する興味。

日本の場合どうだろうか。純粋のオ

リジナルをそのままでは大きな抵抗が
起ることは必然的なことであるにもか
かわらず、他の国の場合、案外私たち
は無責任にそのオリジナルを歓迎する
気持があるのではなかろうか。こんな
ことがクラフトや家具にも通じるもの
であろう。

◆ディスプレイ

主催国カナダは《人間とその環境》
という大テーマがあるのだからサブテ
ーマによって各館とも非常な苦心を払
って真剣にこれに取り組んでいる。万博
のテーマがこのような人間や共同社会
と取り組む哲学的テーマに推移してきた
ため、これらの問題を企画し、演出す
るためのプロデューサーは如何に多くの
協力者を必要とし、したがってその取
まとめ、調整には重大な責任と難しさ
があるということを痛感させられる。

ある EXPO'67 の責任者は《最も苦
しかったのは金と時間であるか、この
ようなむづかしいテーマの表現が観衆
にどれだけ理解を与えたか 疑問であ
る》といていた。全く《理解させる》
《理解する》ことはむづかしいこ
とである。

外国館その他全体を通じて企業PR
や商品販売拡大主義的展示色のないの
は確かであるが、決して工業その他の
製品が並んでいないということではな
い。立派にその国の産業、技術の所産
としてそれぞれ展示がされているが経
費をかけて気持よく、上手に展示して
いるのである。

しかし展示の圧巻は宇宙科学をはこ
るアメリカ、ソ連であろう。何といっ
ても見応えのあるもの、興味のあるも
のに違いない。チェコ館のガラス、レ
ース、装身具にしばった展示物そのも
のの価値が高いのと、展示のために新
しく製品（ガラスの大きなオブジェな
ど）を創作している点にある。このよ
うな金のかけ方は日本などでは真似の
できないことといえよう。しかしスカ
ンジナビヤ館のような製品や製品の部
品（デンマークの椅子の脚による）オ
ブジェ風の展示などは面白くあっても
何かしら問題がありそうである。

特筆すべきものに映写技術がある。
シヤトル21世紀博科学館で実施された
チャールズ・イムズの分割多画面映
写、四方ミラー拡大映写、サークルビ
ジョン、立体投影映写などあらゆる手
法によって、能動的効果をあげてい

る。中でもカナダ迷路館のワイド、垂
直水平の二面映写を吹抜け3階層で見
る装置は圧巻といってよい。それらの
映画、スライドがまたとても楽しく、
美しい。どの館もそのため長蛇の列を
なしているが1回20分の回転率が問題
であろう。

アビタ'67 は多くの問題を含む将来
の住宅の新しい構築法と形式を示すも
のである。遠景ではかなり魅力に乏し
いコンクリート塊としか見えないが、
接近してその変化に富んだ形態と、機
能を理解すると大変興味が湧いてく
る。しかしその複雑なユニット空間の
組合わせは一見私たちの行動をとまど
いさせ各層、各戸の連絡には残された
問題が多いようである。内部のビルト
イン設備は画一的ではあるがよく整理
されているし、新しい材料を駆使され
ているが、室内の移動性家具に対する
配慮は時間ぎれのせい、感銘すべき
ものとはいえない。

特に私の興味をそそつたものとして
カナデアン、パシフィック、コミン
コ館がある。これは6面の分割スクリ
ーンに若者の生活を美しい演出で映写
している一方、展示室では人間の五感
すなわち触、視、味、聴、嗅覚を感じ
させる一つの実験的ディスプレイが行
なわれている。将来のディスプレイに
大きな示唆を与えるものとして興味深
いものである。

◆日本館

日本では洵に悪評高く、70年の日本
万博とからみ合わせて新聞、週刊紙上
を賑はせている。その内部展示設計を
引受けた私もその責任者の一人であ
る。

政府の大方針＜貿易振興＞＜海外親
善促進＞＜文化紹介＞が閣議了承で決
定され、私の関係した時点では企画未
決定のまま建築は設計を終えて、現場
工事が始っていた。以来半年、この企
画内容が建築家とデザイナーに委ねら
れ、練られて、纏ったのが——メイン
テーマ ＜躍進する日本 Japan in Pro
gress＞

第1部＜環境との調和Harmony with
Nature＞

第2部＜伝統との調和Harmony with
Tradition＞

第3部＜科学との調和 Harmony with
Technological Advance＞

で第1部は日本人のリクリエーシ

ン、勤労、家庭生活を通して明るく、
平和に、そして古い文化、新しい文明
を調和させて生きている姿を表現し、
第2部では＜日本人の坐生活の伝統＞
の将来への展開の一方法を提案し、外
国人に批判を求めるため抽象的な室内
を見せている。主として絨氈の敷いた
広い部屋で座椅子の変化ある使い方を
示したものである。また休養のための
私生活では履物はやめなさいとも提案
している。第3部は日本の代表的科
学、技術の発展的分野としてエレクト
ロニクスに絞って＜制御＞＜通信＞＜
医療＞にこれを分けて展示することに
した。

日本のエレクトロニクスは米国に比
較したら問題にならないが、アメリカ
に次いでその発展と利用はめざましく
経済的な生産技術も特筆すべきもので
あって、日本の産業、学術、研究など
に今後大きな変革を与えるものである
からである。

しかしあんな非難を受けなければなら
なかった理由は何であったのか。いく
つかの理由をあげることができよう

- 1 閣議了承の大方針に誤りがなかったか。
- 2 企画の責任者が明確ではなくその
決定がおくれたこと。
- 3 企画不在のまま建築が進められた
こと。
- 4 全体予算も外国館に比して小さく
面積が狭溢にすぎたこと。
- 5 予算配分が建築に偏り、展示予算
が極少に切りつめられたこと。
- 6 現地は冬季凍結のため4カ月輸送
作業不能のため内地での作業が急
がれたこと。
- 7 事務局の担当者の手不足が設計者
側の負担雑務を多くしたこと。

などがあげられよう。

このように理由を上げると弁明のよ
うになるが、外国の場合建築費と展示
費の割合は5：5が一般であるのに、
日本館は5：1という。あまりにもひ
どい比率でそれも印度なみの総額なの
だから理解できよう。金がなければな
いような上手な設計をするのが優れた
デザイナーの手腕だといわれれば一言
もない私であるが、低予算にも限度と
いうものがある。私は予算の明確にな
った時点(かなり進んでから)ではっき
りお断りすべきだったかも知れない。
これが見本市くさい展示に見えた原因

をなしているのだろう。いわゆるパンチの利いた技術が見られなかったのである。

いつものことながら企画不在のままに進むこの種の催しの逆行のプロセスの恐しさも痛感させられた。

ただ第2部の〈坐る生活〉のディスプレイが現地を見たカナダ、アメリカ人には大好評でその後私の手元に賛辞をならべ、あるいは自宅にその設計を利用したいとか、学生のための資料にしたいとか、すでに20通ほどファンレターが舞い込んで、私たちを悦ばせている。その後イタリー、ソ連のデザイナーやニューヨークタイムスからも写真の要求があったり返事に大変忙しい。こんなことを経験して、日本人の自分の国に対する自逆性、一部マスコミの無責任な放言にいささか腹が立つ。どうして、よいものまで認めようとしなないのか。諸兄のために私のにがい経験を参考に供する次第である。

1～2カナダのデザイン事情について

て書き足しておきたい。

今回のEXPO '67ではカナダでも建築家が独走したきらいがあるが、ディスプレイ担当デザイナーは予算、面積を示されて、独自のアイデアと契約によって仕事が進められた。ディスプレイの経費予算配分の一例を示すと

プロジェクトデザイン	30万ドル
工費、メカニズム	150万ドル
管理	35万ドル

(映画経費は別途)ということであるから工費の20%がデザイン料に当てられている。またあるテーマ館の例であるが建築費1,700万ドル出展費1,700万ドルという1:1の割合が一般のようである。

またカナダでは工業デザイン事務所もデザイナーの数も少なく、ジャコウスSガイロン社は平時11人程度で、インテリア、ID、グラフィックなど何でもこなしているが、EXPOでは臨時編成して55人程度で仕事を消化したといっている。このガイロン社はカナ

ダでは最も有力なデザイン事務所のようである。

またカナダにはCID(カナダ工業デザイン協会)があるが会員が140名。一般のフリーランスの事務所は6名位大きなグラフィックの事務所が2社あるとのこと。

工業デザインの教育もアメリカ依存が多く国内の大学にはデザイン関係の独立科はなく、全国で美術系のカレッジでデザイン教育が行なわれていて、決して程度の高いものではないと関係者は語っていた。

Ontario College of Art, ID Department Institute of Applied Arts, Department of Education government of Quebec University of Waterloo, Department of Design
このような事情を考えると、よくも今年カナダがICSIDの総会、国際会議を開いたものだと思われ、彼らのエネルギーに感心せざるを得ない。

EXPO '70 PRについて

中井 太一郎

◆PRについて

不幸にしてTV嫌い、また不勉強のため、万博PRはどこでどうやっているのか殆んど見聞きしていません。僅かにトラブ的な新聞記事や、タクシーの胸腹のちぎれた桜の花びらマークを2～3回見かけた程度です。まことに申し訳ありません。オリンピック開催の年ヨーロッパを一巡しましたが、スイスの小さな時計店のウィンドである亀倉氏の傑作ポスターを一枚見た切りでした。サイズがこちらの規格の半分くらいしかなく、とても街頭のPRの場に貼れないとのことでした。ポスターサイズは大きくしたいものです。

◆テーマについて

「サアー、サアー、イラッシャイ、見ないと損するダダイズム展」古い話ですが、ダダがチャーリュッヒで誕生の宣言をしたときの文句です。万博はあくまで世界的なお祭り、面白いドラマチックな造型芸術であり、見ないと損をする催しであってほしいものです。高度の機械文明展でも、国力の誇示展でもありません。例えば日本製ICBMやガスタービンカー、何10万屯の

タンカーができて子供っぽく見せびらかせたくないものです。巨大なティボリー(コペンハーゲンの遊園地)のようなもので、テーマはどうあれ世界中の人々が集って愉快的なミーティングをする場にしたいものです。

◆展示について

エイゼンシュタインのモンタージュ理論が映画の生命(カメラマンは作品価値の半分の責任をもつ)であるように、万博テーマや企画がどうあれ、ディスプレイを演出する各アーキテクトやデザイナーに仕事の総てをまかし切れない限り完璧な成功は期待できません。この前のニューヨーク博で見ごたえのあった館は総て著名なアーキテクトやデザイナーの作品で鮮明な個性が物を言っているようでした。ちなみに

◆ニューヨークステイト館(巨大な極彩色のコモリ傘の天井のもとで終日楽隊やコンサート……フィリップジョンソン)

◆ペプシコーラ子供館(青空に風車や鯉のぼりが泳ぎ廻るオブゼ……チャールス・イームズ)

◆ジョンソンワックス館(ダッジマハールを骨組みのみにしたようなもの)……ミノルヤマザキ

◆IBM館(タイプライター文字球の内側空間を動くステージと観覧席に

したもの)……不詳

◆スペイン館(中庭のみで外窓のない2階建、大半が手工芸品のみの展示で要所のほほえみかけるナポレオン型帽子の正装兵士たちが効果的)……コンペ入賞作

◆イーストマンコダック館(TWA空港をより柔軟にダイナミックにしたもので、照明家具などこまかいすべてのものを同一感覚でまとめたもの)……イエロー・サーリネン

独立した名館はすべて各アーキテクト、デザイナーの芸術作品と考え、万博テーマや各国のポリシーは上手にカバーして、自由に個性を創造発展させることが成功の鍵だと思います。また上記スペイン館のように各国の代表的美男美女大量に出場させ生きた展示をしたいものです。

◆その他の思いつき

A 閉会時クジ引きで、各国展示品を交換する。例えば日本館展示品はアフリカのどこかの国と、アメリカ館はソビエツトのように。

B 万博を見たらとても戦争など馬鹿らしくてやって行けないという平和攻勢の具にする。

C XVトリエンナーレ展は大阪万博終了後1971年行なう(Interiors June '67)とあるが、同展を同博と同期、同場所で開催するよう交渉する。

インテリア空間における行動の研究

荒川 善夫

1. 研究の目的

建築あるいはインテリアデザインにおける室内設計計画は、その室内空間の目的に対して、あらゆる側面から必要にして十分な体制を追求するものでなければならない。

これを設計技術の観点からいえば、室内における生活を目的とした、「人」と「室空間」の co-ordinate（関連づけ）であるといえよう。

現在この co-ordinate には幾つかのアプローチがある。

その一つは、人体、動作、動線など、生活行動に必要な空間構成のための要素や、採光、照明、音響、室内気候など、物理的、生理的環境調整のための要素を中心にした考え方であって、人と室空間を共に定量的な「もの」として co-ordinate する実用性に重点をおいたアプローチである。

次に、マテリアルによって構成されるエレメント、さらにエレメントによって構成される空間、という系列の総てにおいて意図される美的表現、あるいは mataphysical な空間の意味付けなどで、人の感情と空間の芸術的象徴性の co-ordinate に価値を求めようとするアプローチがある。

さらに、これらの室空間が備える実用性、芸術性を結果と考えそのための手段である工学的な技術を、設計計画の主体にしようとするアプローチもある。

いうまでもなく、これらは建築、または室空間の設計計画における設計者のとるべき姿勢なり、出発点の相違なりを示したに過ぎないものであって、どのアプローチを選んだとしても、結果においてそれらは、室空間においてからみ合い、統一され、単独で存在することがないのは勿論である。

ところで室空間の持つ実用性、芸術性、技術性は、ともすれば人の意識に直接対応するものと考えられたことがあって、いったん具体化された室空間が、設計計画の内容にかかわらず、「人」とその行動に対して物理的な規制を加えたり、感情や情緒といった人間性を無視することが少なくない。

これは生活の主体である「人」が、室空間から一方的に制約を受け、設計に対して feed-back が与えられていないことを示すものであって、設計計画の大きな欠陥であると同時に、現代の

生活に人間疎外の問題がクローズアップされ、論じられている原因の一つでもあると考えられる。特に建築の Prefabrication（工場生産）や mass-production が、いろいろな形と方法で進められている現在において、こうした欠陥の是正な重要な課題ではないだろうか。

勿論従来の設計計画技術の中に、この問題に対する有効な解決方法が潜んでいることも考えられるが、もしそれ以外の分野にも有効と思われる手段があれば、それを追求することも必要であろう。

最近、そうした問題に対する究明の試みとして、心理学的なアプローチが注目されるようになった。

「人」と室空間の関係を、意識面の交渉だけに限らず、生活行動を、その動機を生む総ての要因にまで掘下げて究明することが室空間の人間性回復に一つの手掛りを与えるものとして、今日行動の科学といわれている心理学的な究明の方法が試みられているのである。

室空間における人の行動が、物的な環境に対して作用することは勿論である。しかし時として、人の側にある生活の「要求」と、物的な環境の持つ「働き」とは独立しているものと考えられ、それが生活の展開に従って1対1対応することが十分な機能のあり方のように理解されることがある。これは「人」と「室空間」の短絡を意味するものといわなければならない。

なぜなら人の行動は物的な環境に対する直接の反応としてではなく、個人の内面にある、過去の経験の記憶やその時点における欲求、その個人に個有の生理的、解剖学的条件などの要因が物的な環境に関して形成するイメージを自己独特の環境とし、これに対する反応として行なっているからである。従って同一の物的な環境にあっても要因の異なる個人によって意味の与え方が異なり、そこに異質の環境が成立するのである。

このように、人の外側にある物的、客観的な環境に対して、人の内面に形成される環境は k.koffka によって「行動的環境」(behavioral environment) と名付けられている。

室空間の設計計画は「もの」としての人と室空間の対応ではなく、このような、行動的環境の存在を対象に進め

るものでなければならないと考える。

すなわち設計計画は、直接には物的な空間構成を手掛けるものであるが、目差すところは、客観的環境の中において人がどのような行動的環境を形成しながら生活を展開するか、を見通して進めなければならない。そして室空間の価値は、その客観的環境が個人に形成される行動的環境に関して、どれだけ貢献するか、によって決まるものである。

本研究は、「人」と「室空間」において形成されるイメージとしての生活の場を、行動的環境と考えて、その実態を行動の型から捕えると同時に、設計における空間の見通しの実状を把握し、そこから設計計画のための一つのアプローチを得ようとするものである。

2. 研究の方法

(a) 手続き

行動的環境を形成する要因は意識面に限られてはいない。従ってこれを「内観」(introspection)だけから把握することはできないのであって、ここに行動実験による観察から帰納的に把握することが必要になる。

行動的環境の形成には客観的環境からの刺激が大きな要因になるが、前述した個人的な諸因子もこれにからみ合っている。これらは常に関係し合っていて解きほぐすことはできないが、諸要因の内の一つに注目し、これを一定にしておいて多数の行動を観察すれば、残余の要因による行動的環境の形成と、その反応である行動の姿を知ることができ、同時に被験者群における傾向から、行動の客観性を把握することもできる。

本研究は、これにヒントを得て諸要因のうち客観環境を行動実験室として固定し、ここにおける被験者の行動を観察することにした。

次に室空間の設計計画は図面を手段として進められるものであるが、これがどこまで実際の空間をイメージし、どこまで行動的環境を見通しながら行なわれるものであるかを調べるため、図面として与えた上記実験室を被験者にイメージングさせ、そこにおける行動を記録させることにした。

この研究は以上のように行動実験と図上調査を主体として試みることにしたが、両結果の相互関連、先行経験の影響などが研究の目的に重要な意味を

持つことから control method (統整法) によって実験、調査の配置と組合せを考慮した。(これは、心理学者小林重順氏の示唆により、大須賀常良・小林重順の論文「リビング・スケール」《建築文化、1965年8月号》の方法を参考にした。)これによって相前後する実験、調査の相互影響を分析することができた。

また主実験から5カ月を経過した後同一被験者に対する追実験を実施して過去経験の痕跡を調べた。

さらに実験、調査の結果は意識面だけの反映ではないが、その時の行動や行動の見通しがどのような根拠によるものであるかを意識の範囲内で追跡するため、アンケートによる追想内観(retraspection)も併用した。

(b) 設備

実験室は刺激条件である構成要素の単純なものほど結果の分析の明確さからいって好ましいと考えて決定した。

(1図) (1表)

この実験室には窓がなく、従って明るさは人工照明に依存することになった。このことは自然採光の不安定さを避けることはできたが、人工照明による照度の不均一(2図)が一つの刺激条件になった。しかしこうした条件は、通常の室内において普通に見られる条件であり、これを前提として結果を判断する限り大きな支障ではないと考えた。

室面積 36m^2 (約 10.8 坪は一般住居の室空間としては広過ぎるが、パブリックな建築における生活空間としては特に広過ぎることはない、天井高さ 3380 mm も室面積に比較すれば特に不自然とは考えられない。

また2つある扇のうち実験には D_I のみを使用し、 D_{II} は締切ってその旨を被験者に周知したが、これが sign として、行動の結果に何らかの影響を与える可能性はあったようである。

実験は、上記の室に対してさらに4種の条件を設定し、それぞれに対して

実施した。

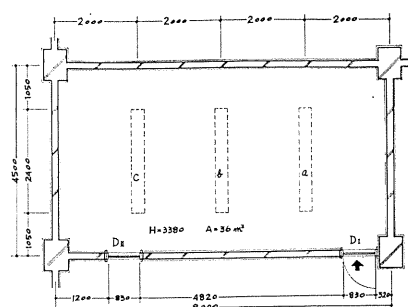


図1 実験室平面図 (mm)

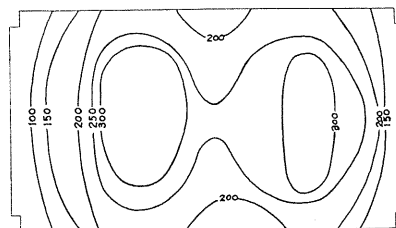


図2 実験室の照度分布 (Lux)

すなわち実験 a は実験室本来の状態で行なったが、実験 b, c, d は幅 2400 mm, 高さ 2400 mm, 厚さ 300 mm の自立するパネル (p) を1図 a, b, c の位置にそれぞれ配置して行なった。これは客観的環境の変換が、行動的環境にどのように作用し、行動の形に影響を与えるかを知るために試みたものである。

パネルの寸法や位置は、これが室を2分してしまわないことを考慮して決め、あくまで一つの室空間における object あるいは core として作用するよう考慮した。

実験室の客観的環境は以上であるが、決して理想的なものとはいえない。しかし或る観点に沿って抽象化した室内条件を設けることは、かえって非現実的な環境を構成することになり、実験結果の意味を狭げ、弱体化する可能性もあるから、本実験室が著しく不適当なものであるとは考えられない。

実験用のいすは位置の移動並びに向きの調節に便利であることから、キャスター付きの廻転スチールいすを使用し、課題解決の合図をするためのブザーを取付けた。

室内	{	床	アスファルトタイル	2.5YR ² / ₂	
		幅	木	人造石とぎ出し	
		壁		プラスター, ラテックスペイント (つや消し)	5B ⁶ / ₁
		天	井	有孔ボード, ラテックスペイント (つや消し)	5B ⁶ / ₁
		扉		合板フラッシュ, オイルペイント	7.5 YR ⁷ / ₂
		わく類		木製, オイルペイント	5YR ⁶ / ₂
		パネル		合板, ビニルペイント (つや消し)	2.5PB ⁷ / ₂

表1 実験室の仕上げ

次に追想内観のためのアンケート用紙を個人の各実験別に準備した。これには行動についての意識的な理由で予想される事項を、あらかじめプリントしておき、2項目以上にわたることを許して選択回答させ、特に追加する理由があればそれを別らんに記述させることにした。

図上調査は、上記の実験室を室内条件別の4種の平面図にし、寸法、仕様などを記入し、さらに実験と同じアンケート並びに課題の教示を加えて1枚にまとめたプリントを与えて実施した。

設計としての正確さからすれば展開図、天井伏図、照明計画図なども示さなければならないが、それが室空間のイメージングにどこまで精密さを加えるものかに、疑問があったので最低限度の条件提示に止めた。

これを逆に考えれば、図上調査の結果は、数値で与えられた室の立上りや条件が与えられない照明の効果が、どのようにイメージされるかによって変わってくるといえよう。

また被験者は、この室の設計者ではないから、与えられる図面以前には室空間に対するイメージはないはずである。従って課題は、まず与えられた図面などから空間をイメージすることが第1の段階になり、次に与えられた課題による行動をそのイメージについて見通すことになる。これは図上調査が直ちに設計者のイメージや見通しを忠実に示すものでないことを意味するが、図面による空間のイメージングが一般にどこまで可能であるか、あるいはどこまで実際の体験に迫ることができるかを把握する方法として行なうことにした。

(c) 課題

行動の媒体になる作業に何を選ぶかは、室内条件の単純化を意図した以上、これもまた単純なものを選ぶことが望ましい。動きが少なく静止状態に近いもので、しかも具体性のある作業として「読書」を選んだ。

(d) 実施

被験者は、高等学校建築科の2, 3学年男子生徒(年齢15~18歳)50名を無作為に4グループに編成し、次のように実施した。

種別 グループ	行動実験					図上調査					順序
	a	b	c	d	総称	a'	b'	c'	d'	総称	
A	Aa	Ab	Ac	Ad	A	Ba'	Bb'	Bc'	Bd'	B'	←
B	Ba	Bb	Bc	Bd	B	Ca'	Cb'	Cc'	Cd'	C'	
C											→
D	Da	Db	Dc	Dd	D	Da'	Db'	Dc'	Dd'	D'	

表2 実験、調査のグループ別区分と表示

NO	質 問	A+D				B'+C'				B				D'			
		a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
1	入口が見えたから	10	6	8	12	7	3	7	8	1	3	2	3	5	3	4	5
2	入口が見えなかったから	1	6	7	4	4	11	10	7	2	3	3	3	1	2	2	1
3	入口に近かったから	2	2	2	1	4	1	2		1	1		1				
4	入口から遠かったから	2	5	4	3	7	3	3	5		3	2	3	2	1	2	
5	うしろに間仕切りのパネルがあったから	6	7	6		12	12	9		6	7	5		4	3	1	
6	うしろに壁があったから	13	6	6	6	12	1	4	4	6	2	2	2	4	2	3	1
7	間仕切りのパネルに向いていたから		3	4	5		1	3						1	2	2	
8	壁に向いていたから	2		2		1	2	1	4	1	3	3	3	2	1	2	
9	前面が広びろとしていたから	11	6	2	9	10	7	2	6	4	5	3	6	6	5	2	7
10	前面が狭く小じんまりとしていたから	3	6	2	1	2	4	3	8		3	4		2	1	1	
11	室のすみっこだったから	5	1		1	9	2	2	2	6		1		2			
12	室の真中だったから	2	2	2	2						1	1	1	1	1	1	1
13	間仕切りパネルや壁に平行に浴っていたから			1		1		4	1		2		1				

表3 アンケートの集計

グループ	人員	行動実験	図上調査
A	12	○	
B	13	○ ← ○	
C	13		○
D	12	○ → ○	

この結果、A, Dグループの行動実験、B, Cグループの図上調査はそれぞれ等質のものになり、総合して分析できることになった。なお実験、調査のグループ別区分と表示は(2表)に従った。

実験はあらかじめ隣室に被験者を待機させ、準備した雑誌を与えて読ませておいた。この室の照度は実験室内の照度以下に押え、視力の馴化を考慮した。

課題の教示(instruction)は待機するグループごとの全員に対して大要次のように行ない、実験の目的は知らさなかった。

「1名ずつ、今読んでいる本を持ってこの室(実験室)に入り、腰を掛けて自分がその本を引き続いて読むのに最も好ましいと思う位置と、向きを決め、ブザーで合図せよ、時間は制限しない」

但し実験に継続した調査、調査に継続した実験の場合には「先に行った実験(あるいは調査)にはこだわらなく

てよい」ことを付け加えた。

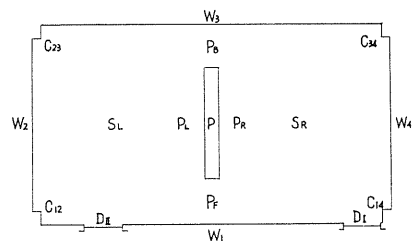


図3 実験室部位記号

観察は、位置と向きの記録の外、被験者が室に入ってからブザーを鳴らすまでの時間も測定した。

実験終了後1名ずつ別室でアンケートに回答を記入させた。

図上調査は前述のプリントによってグループごとに一斉に行なった、課題は、プリントを読ませたうえ、さらに口頭で徹底した。この場合各平面ごとに必ず1箇所ずつ位置と向きを示す記号を入れさせた。

3. 結果と条件分析

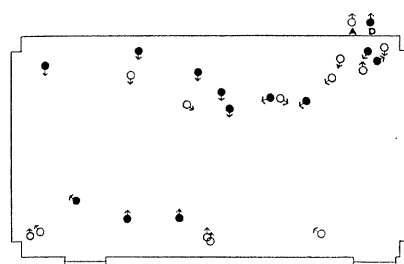


図4 Aa+Da

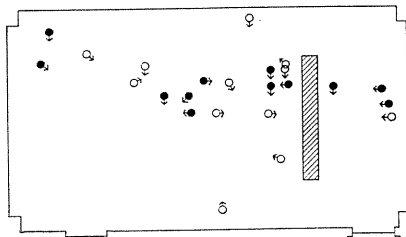


図5 $A_b + D_b$

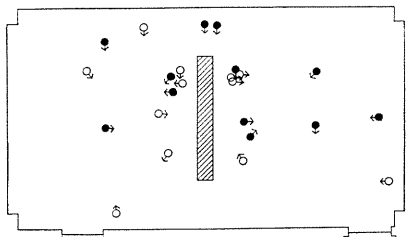


図6 $A_c + D_c$

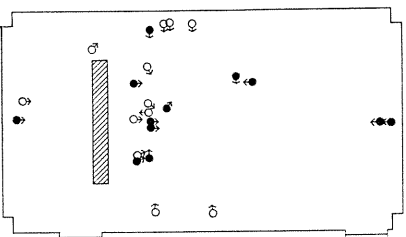


図7 $A_d + D_d$

アンケートの集計 (表3) 室内部位記号 (図3)

(a) 行動実験

$A_a + D_a$: 24人 (図4)

W_1 の左寄りと W_3 を背にした分布が2群に分かれ、中央のあいまいな位置を占める者のいないのが特徴である。これはアンケートに回答頻度の多い「うしろに壁があったから」「前面が広びろとしていたから」に対応している。

また W_3 側に分布した者 (66%) の多くが D_I , D_{II} を含む W_1 を視野に収め得る状態にあるのは「入口が見えたから」に対応するものであり、全室内を視野に収め得る位置と向きが、実際に見る見ないは別にして好まれる傾向にあることを示している。

D_I が被験者の内面にどのような影響を与えたかは、即断できないが、次のような推察ができる。

出入口はその室とは別の領域に通じる部分であり、扉はその sign である。従ってそこからは予想されない影響 (個人にとって好ましいか否かにかかわらず) の加わる可能性が意識の有無に関係なく働いている。 W_3 を背にした分布は、これと正面から相対するという積極的な姿勢を示し、 W_1 を背

にした分布は、 D_I を避け直接のアクションを嫌い、タイミングをずらした後に対処しようという姿勢が感じられる。

これは被験者個人の要因 (性格とか、その時点における欲求など) に関係があると思われるが、さらに多数のサンプルや、アンケートの掘下げ (probing) がなければ断定できない。

$A_b + D_b$: 24人 (図5)

P を W_4 寄りに配置した場合、 D_I を入った所から細い通路のようなスペースが構成されている。この部分は照度も十分で読書に差支えることはないが、スペースの狭あい感と、 S_L 空間に対する誘意性 (valence) から避けられたようであり、被験者の内20 (83%) 人までが S_L 側に分布した。

P_L の分布は特に集中していないが、P に何らかの依存をしながら位置と向きを決めたように見受けられる。この部分の向きは一定せず、P を背にした者5人に対してPに向く者が3人ある。これはPをうしろに控えて座ることと共に、Pを視野に収め得る向きも人によっては好まれることを示している。

P に平行して W_1 に向く者が P_R の側を含めて人あること、 S_L の W_1 寄りの分布が W_1 を背にした1人しかないことなどは、 $D_I \sim P_F \sim W_1$ に渡る部分が通路のように受け取られ、敬遠された結果ではないだろうか。

なお、 W_4 を背にしてPに向く3人は、小じんまりした場が好まれる例として注目される。アンケートはやはり「うしろに壁、パネルがあったから」が多く追想されているが、入口が見える、見えないについては回答が等しく $A_a + D_a$ と異なった傾向を示している。

$A_c + D_c$: 24人 (図6)

室の中央にパネルを配した場合であって S_R , S_L への分布は均等である。

P_R , P_L にそれぞれPを背にする比較的集中した分布があり「うしろにパネルがあったから」のアンケート結果の頻度に対応している。これに対して上記の分布をやや離れてPを取り囲むような分布が見られる。これは「パネルに向いていたから」のアンケート結果が、他の実験の場合よりも多いことからもうなずける。

$A_b + D_b$ 同様に室内の core は後ろ

だてにされると同時に、やや離れて、これに向き合うことも読書にとって都合の良いことが分る。

ただしこれは、読書が目的であるから、視野の中に絶えずパネルがあって、眺められているというのではなく、ただパネルが前にある、という事実が重視されたのであろう。また P_B で W_3 を背にした2人は、 D_I , D_{II} を含めた全室内を視野に収め得る位置として決定されたようである。

$A_d + D_d$: 24人 (図7)

P_R に集中している。しかも P_R を中心に $W_1 \sim P_R \sim W_3$ にかけて連続した分布が特徴である。

これは、アンケートで「うしろに壁、パネルがあったから」「入口が見えたから」「前面が広びろとしていたから」の回答が特に多いことに対応している。また $A_b + D_b$ に見られた P_F 部分に対する敬遠が少ないことは、 D_{II} が D_I ほど影響していないことを示すものであろう。

以上は先行する実験、調査のない行動実験の結果である。過度の集中はないが、それぞれに独特の分布のパターンが認められる。

これは個人の内面に存立する行動的環境に共通した傾向があることを示しているものであろう。しかし分布からはずれた特殊な位置や向きを示す者にも、その個人にとっては、それなりの意味が潜んでいることは見逃せない。

またそれぞれの室内条件における分布状態は把握できたが、それらの間における変化の連続性 (あるいは不連続性) については、はっきりすることができなかった。

さらに位置、向きの決定は、入室後比較的早期の体験による行動の結果であって、或る時間を経過した後の行動的環境の変化による影響については調べなかった。

(b) 図上調査

$B_a' + C_a'$: 26人 (図8)

壁面の中央及びコーナーに集中しており、特に W_1 , W_3 , C_{12} , C_{23} において顕著である。しかし W_1 , W_3 を背にする者が多いことは $A_a + D_a$ と同じである。

アンケートの結果は「うしろに壁があったから」と、「前面が広びろとしていたから」が実験と同程度に多く回答されたが、それに反して「入口が見

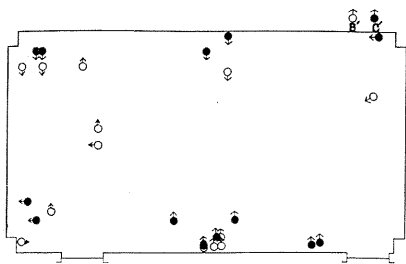


図8 $B_a' + C_a'$

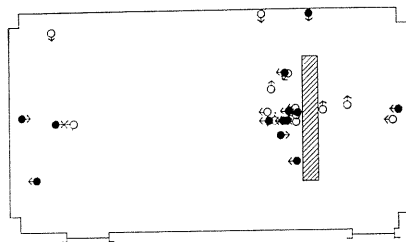


図9 $B_b' + C_b'$

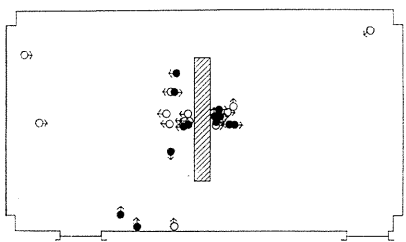


図10 $B_c + C_c'$

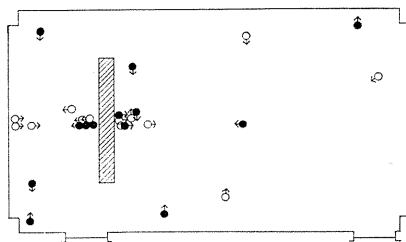


図11 $B_d' + C_d'$

見えたから」が少なかったのは、扉の影響が想起しにくかったためのものである。

また「室のすみっこだったから」が意外に多く回答されたのは、図面による空間イメージよりも、図形としての規則性に支配されて行動を位置付けし、狭あい感や圧迫感が想起されなかったのではないだろうか。

$B_b' + C_b'$: 26人 (図9)

S_L と S_R への分布の比は $A_b + D_b$ と同じ位であるが、特定箇所への集中が認められる。特に P_L には15人 (57%) が集中している。

W_1 を背にした者がいないのは、 $A_b + D_b$ 同様 $D_1 \sim P_F \sim W_1$ に沿った部分が通路として影響したようで、実際の体験に似たイメージングが行なわれている。

P_L の分布は大体 P を背にする者が多い。中には P に向く者、 P に平行す

る者など実験の場合に似通った傾向がある。しかし実験では、 P に平行に向きを決めた者6人が、すべて W_1 に向いていたのに対して、ここでは3人とも W_3 に向いているのが特徴で、やはり D_1 の存在が実際の体験ほど重要に感じられなかったためであろう。

また P_B で W_3 を背にした1人は実験 $A_c + D_c$ の2人と同様に室全体を視野に収め得る位置と向きを理由にして決定したものであろう。

アンケートの結果は、「うしろにパネルがあったから」が半数以上を占め「前面が広びろとしていたから」も多かった。特にこの調査では「入口が見えなかったから」の回答が多かったが、これは P_L の分布が大多数であることからいって当然のことである。

$A_b + D_b$ に比較すると P_L の分布が P を中心にしていることは同じであるが、実験では分布の密度が小さく広範囲に渡っており、向きは一定していないのに対して、調査では P_L の中央付近に極端に集中している。これはどちらも P が core として働いていながら、調査では高さのイメージに乏しいため、 P が平面として受け取られ、 P の影響、あるいは効果が近接した部分にのみ存在すると見通された結果ではないだろうか。

$B_c' + C_c'$: 26人 (図10)

約80%が P の左右、それも中央付近に集中していた。これはアンケートの結果で「うしろにパネルがあったから」の回答が非常に多かったことからもうなずけよう。

また「前面が広びろとしていたから」の回答が少なく、「入口が見えたから」「入口が見えなかったから」が比較的多い。 $A_c + D_c$ に比較して P を取り囲むような分布は見られない。

$B_d' + C_d'$: 26人 (図11)

P の両面と W_2 中央付近の集中が特に顕著であるが、 D_1 付近を除いた全体にも分散していた。 $A_d + D_d$ と異なって、 S_L の分布が多い。これはアンケートの結果で「前面が狭く小じんまりしていたから」の回答が多かったことに対応している。調査では P_L の狭あい感、圧迫感、照度不足などが想起できなかったためであろう。

以上が図上調査の結果である。特徴は壁面の中央、入りすみ、パネルの中央などに規則正しく極端に集中してい

ることである。

これは与えられた資料だけでは、空間のイメージと、それによる行動の見通しが十分に行ないにくく、個人差が限定されたためであろう。これはまた平面図を図形として見た場合の規則性に支配された結果とも考えられる。

さらに図面を図形と考えた場合、図形に関する「ポテンシヤル場」が考えられ、分布が、その「場強」(potential energy) の影響を受けながら決定されたことも想像されたが、これについての検証は次回に譲った。

(c) 調査に継続した行動実験

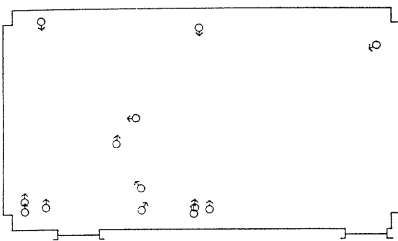


図12 B_a

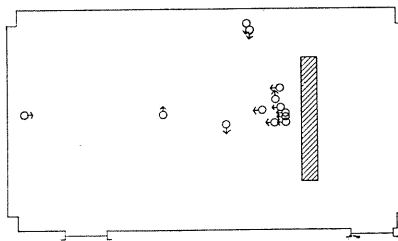


図13 B_b

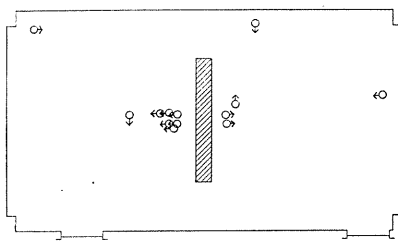


図14 B_c

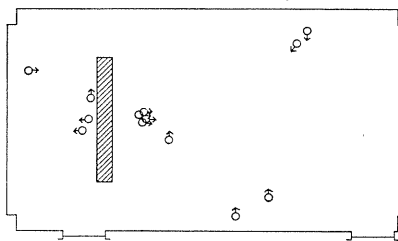


図15 B_d

B_a : 13人 (図12)

調査から実験に移って位置と向きが、大きく変わった者は3人で、あとは調査時の位置と向きをそのまま保っている。しかし実験 $A_a + D_a$ に近い分布の傾向も見られ、中間的な分布といえよう。

アンケートの結果は、やはり「うしろに壁があったから」が多く、「入口が遠かったから」「すみっこであったから」がこれに次いでいる、この結果は図上調査の結果に近似している。

B_b: 13 人 (図 13)

調査から実験に移って位置と向きの変った者が 7 人ある。特に調査時の S_R における分布が実験ではなくなっているのが特徴で、それが P_L 中央附近への集中化を強めることになった。従って、実験であるにもかかわらず、実験 A_b+D_b のような分散がなく、調査 B_b' + C_b' 以上に極端な集中が認められる。

B_c: 13 人 (図 14)

変更は 7 人で、やはり集中化を強めており、先行経験である調査 B_c' + C_c' に近い分布を示している。

B_d: 13 人 (図 15)

変更は 4 人で、P への集中が極端になっている。調査 B_d' + C_d' で W₂ の中央にあった 3 人が実験では移動しているが、これは S_L の実際の体験が狭あい感や、照度の不足を与えた結果によるものであろう。

以上が調査に継続した行動実験の結果である。全般に先行する調査の影響を強く受け、実験であるにもかかわらず、実験 A + D の分布よりも調査 B' + C' に近い結果を示し、集中化がより極端になる場合が多い。

これは先行した調査におけるイメージングが、実験における体験によって修正されるよりもむしろ実際の体験を支配する力になっていることを示している。

(b) 実験に継続した図上演習

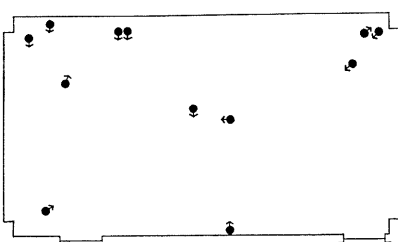


図 16 D_a'

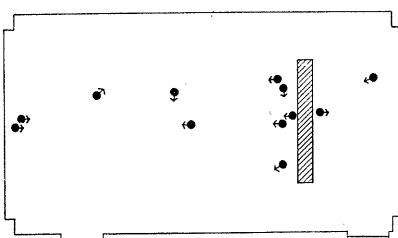


図 17 D_b'

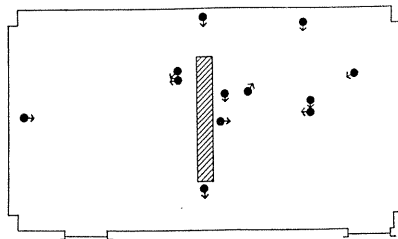


図 18 D_c'

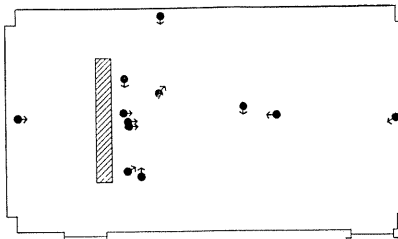


図 19 D_d'

D_a' : 12 人 (図 16)

実実験から調査に移って位置と向きが大きく変ったものは 5 人である。

実験の経験がここにも現われているが、幾分 C₂₃, C₃₄ への集中化の傾向が感じられる。アンケートの結果は実

験 A_a + D_a の結果に近似している。

D_b' : 12 人 : (図 17)

位置の変更は 4 人で、向きの変更は 8 人におよんでいる。

分布の状態は実験と調査の中間的パターンを示している。

D_c' : 12 人 (図 18)

変更は 4 人である。分布は実験に近く調査 B_c' + C_c' ほどの集中化は認められない。

D_d' : 12 人 (図 19)

変更は 1 人に止まり、ほとんどが実験の分布に一致している。

以上が実験に継続した図上調査の結果である。実験が室空間における実際の体験に基く行動の結果であるから、これを図上調査において修正するのは不自然である。しかし実験の際に何らかの不満があって、それを調査で修正した可能性や、前述した図形に関する場強が原因になっているのではないかと考える。

(e) 行動実験に要した時間

グループ 実験	A			D			B			全平均
	最短	最長	平均	最短	最長	平均	最短	最長	平均	
a	分 秒 0・18	分 秒 2・29	分 秒 1・01	分 秒 0・17	分 秒 3・27	分 秒 1・35	分 秒 0・13	分 秒 2・37	分 秒 1・19	分 秒 1・19
b	0・22	1・58	0・57	0・23	3・07	1・35	0・16	3・33	1・37	1・23
c	0・15	2・18	0・59	0・27	2・18	1・08	0・20	2・31	1・27	1・12
d	0・19	2・03	1・00	0・41	3・03	1・34	0・23	2・56	1・48	1・28

表 4 実験別所要時間

表 4 は各実験に要した時間の平均値である。特にグループ A の所要時間が短い、これは追実験の際の測定結果から検討しても、構成人員の性格に個々の傾向であることが分った。実験別の所要時間は c, a, b, d の順序に長くなる傾向がある。これはパネルのない場合や、パネルが中央に配置される場合のように、空間の構成が規則的で、室空間の把握が容易なもののほど行動し易いことを示している。もしそうとすれば、室空間にも pragnanz (簡潔性) の法則が成立することになると考えられる。

(f) 追実験

前述の実験、調査から満 5 箇月を経過したのち、前回の被験者の中から抽出した被験者に対して a 実験を再度試みた。

目的は先の実験、調査の経験痕跡による影響を知るためと、室内照度に対する意識を内観して、その影響を知るためである。

被験者は前回のグループ A 12 人中 6 人、グループ B 13 人中 10 人、グループ D 12 人中 7 人の計 23 人である。

手続きは前回と同様である。ただアンケートには前回の質問のほか、照明に関する質問を追加した。(表 5) (表 6) (表 7)

No	質 問	A(a)	B(a)	C(a)
1	明るさが気になった	2	5	4
	a この位置と向きの明るさが丁度よかったから	2		1
	b 明るさは不足であったが読書するにはこの位置が好ましかったから		5	3
	c 明る過ぎたが読書するにはこの位置が好ましかったから			
2	明るさが特に気にならなかった	4	B	3

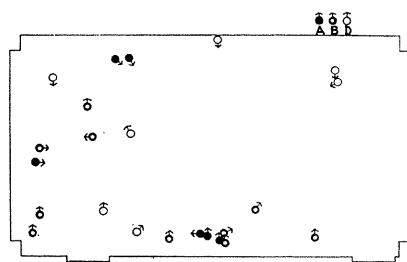
表 5 アンケートの集計 (追実験)

N0	質 問	A(a)	B(a)	C(a)
1	入口が見えたから	3	2	3
2	入口が見えなかったから		5	2
3	入口に近かったから	1	2	
4	入口から遠かったから		1	1
5	うしろに壁があったから	4	5	5
6	壁に向いていたから		2	
7	前面が広びろとしていたから	5	2	3
8	前面が狭く小じんまりとしていたから	1	3	1
9	室のすみっこだったから		2	2
10	室の真中だったから			
11	壁に平行に浴っていたから		1	

表6 アンケートの集計(追実験)

グループ 実験	A			B			D			全平均
	最短	最長	平均	最短	最長	平均	最短	最長	平均	
a	分 秒 0・12	分 秒 1・33	分 秒 0・49	分 秒 0・47	分 秒 2・21	分 秒 1・36	分 秒 0・29	分 秒 3・33	分 秒 1・23	分 秒 1・20

表7 実験別所要時間(追実験)



20 図 A(a)+B(a)+D(a)

A(a): 6 人(図 20)

前回の実験に対して、位置、向き大きく変わった者が2人、位置のみ変わった者が2人、残る2人はほとんどそのままであった。

従って2~4人が何らかの痕跡を残しているようであるが、これが前回の実験の記憶だけの影響によるものなのか、日常の生活から形成された個人の行動習慣によるものかは不明である。照度に関しては6人中4人が「気にならなかった」と答え、2人が「気になった」と答え、さらに「この位置と向きの明るさが丁度よかったから」と答えている。この2人は照度 100Lux, 230Lux の場所に位置を占めた。

B(a): 10 人(図 20)

前回の実験は調査に継続したもので、その分布は実験と調査の中間的パターンを示していたが、その傾向が依然として残っていたようである。

被験者10人中、調査→実験→実験の系列を通じて、全く同一の位置と向きを保った者が3人、再び初めの図上調査の状態に戻った者が1人、前回の実験に同じ状態の者が2人、位置だけ

同じ者が1人で、これら7人に何らかの痕跡が認められる。

照明に関するアンケートでは、照明が「気になった」者が5人「気にならなかった」者が5人で気になった者の全部が「明るさは不足していたが読書するのに、この位置と向きが好ましかったから」と答えている。この5人はそれぞれ 70Lux, 210Lux, 220Lux, 240Lux, 250Lux の位置を占めた。

D(a): 7 人(図 20)

前回の調査は実験に継続したものでその分布は実験と調査の中間的パターンを示していたが、今回の実験でもそうした傾向が認められた。

実験→調査→実験を通じて、全く同一の状態を保った者が2人、調査の時の状態と同じ者が1人であった。

照明に関するアンケートでは照度が「気になった者が4人、気にならなかった者が3人で、気になった者の内1人が「この位置と向きの明るさが丁度よかったから」と答え、250Lux の位置を占め、他の3人は「明るさは不足していたが、読書するのにこの位置と向きが好ましかったから」と答えて、それぞれ 150Lux, 190Lux, 250Lux の位置を占めた。

4 結 論

同一の室空間の中においても行動の型は、人によって一定しない。

従って本研究の実験においても行動の型は、人によって一定しない。

従って本研究の実験においても、行

動の分布には、相当のばらつきが認められた。しかしそれは、全然無秩序なものではなく、各実験ごとに特徴あるパターンを形成している。これは、室内条件が一定していたことの外に、被験者の生活が高等学校生徒という特定の領域に属しており、共通した欲求、あるいは共通した知識や経験を持っていたことに起因する。

従って分析の結果から得られた諸傾向を、或る範囲の要因による生活行動を通した、「人」と「室空間」の関係と見ることはできるが、これをパターンの典型として固定することは、危険である。

世代、性別、生活条件など人間的な領域を異にする個人を考え、さらにそれがどのように行動するかを考えると、この分析の結果は、分布のパターンだけでなく、個人毎の反応の型や、さらには例外的な反応にも重要な意味を認めなければならない。

これを図面による行動の見通しについて、検討すると、ここでは非常に規則的で集中した分布の傾向が認められる。これは、図面による室空間のイメージングには、個人差が少なく、そこに形成されるイメージとしての、行動的環境に共通性があることを示している。いい変えれば、図面による空間イメージングには自ら限界があることを意味している。このことは行動の決定に関して図面が、室空間を表現するための sign としてよりも、単なる図形として認識され、図形に関する prägnanz が強く影響していることも原因ではないかと考えられる。

こういう傾向は図面を手段とする、設計計画の過程全般についていえることであって、設計計画における室空間での生活や作業空間の計画が、極めて graphical なパターンに支配されながら見通され、無機的、幾何学的な人間行動の追求に偏る危険性がある。

これは実際の行動がパターンとして、有機的、力動的な分布を示しているのに対照的である。したがって設計計画における室空間の見通しは図面を、図形として見る限り、目的に対して十分な効果を期待することはむしろ難しく、あらゆる面から行動の実態を把握して、図面以前のイメージングから設計計画の妥当性を図らなければならない。

また実験における分布が室内のBE (building element) である壁、パネルなどに関して、或る傾向を持っていることは、当然のことながら室空間における行動的環境の形成がBEに大きく依存し、BEとの間に何らかの、力関係が存在していることを意味するものであろう。

これは、図形に関する potential energy と同様の現象が空間においても成立していることを示すもので、今後この方面からの究明も必要と思われる。また室内条件の規則性が、室空間の構造把握と行動のしやすさに関係のあることは、行動決定に要した時間からも明らかである。これは空間に関する prägnanz に関係するものでないだろうか。

さらに実験と調査相互の先行経験

や、追実験による過去経験の追尾において、記憶や経験が相当強く行動習慣を形成することが分った。これは日常の生活経験や、学習が暗示となって、生活行動に影響することを意味するものであり、インテリア空間は、このような要因を尺度にして評価される場合が多いと考えられる。従ってインテリア空間の設計計画では、特定の行動習慣から、より充実した新しい生活行動が誘導できるような環境を、創造することに留意しなければならない。

以上は継続中の研究における中間的な結論であって、今後更に問題を発展させ、よりの確な結論を導くため、下記について更に究明したいと思っている。

1. 室内条件、作業課題、被験者およびその組合せのバリエーションによる実験と調査。

2. 平面および空間の prägnanz 並びに potential energy に関する究明。
3. 既存のインテリア空間における行動実態の観察と調査。
4. 文献などによる古典的室空間における行動の究明。

参考文献

- 大須賀常良・小林重順「空間のリビング・スケール」建築文化1965年8月号 彰国社
相良 守次「行動の理解」 牧書店
横瀬 善正「視覚の心理学」 共立出版
高木 貞二「心理学研究法」 岩波書店
増田 惟茂「実験心理学」 岩波書店
W. ケーラー (相良守次訳) 「心理学における力学」 説岩波書

会 員 近 況

○有川勲一 (フリー)

- ・ファンタジー (ドラブイン) 世田谷 設計監理完成 42. 6
- ・キーマンパークラブ (浅草) 設計監理完成 42. 7
- ・串よし (串かつ) 新宿 設計監理完成 42. 8
- ・住宅設計監理中 新宿

○伊藤利一 (コスガ)

9月21日より約2カ月間北歐経由アメリカへ社用にて出張

○宇塚嘉寿 (日本木芸)

三越デパート プロパー用収納家具

○池辺武彦 (東横)

勤務地移動 白木屋より東横へ・9月 渋谷区渋谷2-24-1

TEL 463-0111

内線266直通461-3114

○大広保行 (小田急)

勤務先移動 荒川家具 8月末退職

小田急デパート第4部勤務・9月 婚礼セットデザイン67型発表

○大阪克彦 (大島木材)

帯広市図書館家具配置図完了
帯広NHK新築家具設計完了
北海道放送新館家具・北海道銀行設計

○加藤えみ子 (伊勢幸)

刀剣博物館家具デザイン

住友海上火災神田ビル家具デザイン

住所変更しました (8月1日)

三鷹市弁礼2-14-7 幸栄荘

○狩野雄一 (千葉大)

講演出張 青森県家具建具企業診断

7月12日から19日

札幌市にて講演 7月26日から28日

日本家具工業会主催ゼミ講師 8月5日

○梶原敏生 (三越製作所)

赤井電機株式会社家具設計

○川上信二 (フリー)

事務所および住所下記に移動

新住所 相模原市鶴の森30番地

鶴の森団地G103

○梶高樹 (日本鋼管)

勤務先が変りました

千代田区神田須田町1-23-2

日本鋼管株式会社船舶部基本計画室

TEL 255-7211

○剣持勇 (フリー)

講演出張 イタリアデザイン学生団に対して講演 8月3日

全国高校長協会夏期ゼミに対し講演

○梶谷通男 (東京家具)

静養を必要とするため本籍地に越しました。栃木県今市市岩崎572-2

勤務先移動 株式会社 家具の上野

栃木県宇都宮市ユニオン通り

TEL 0286-3-4451

○小菅澄男 (原好輝デザイン事務所)

区画整理により住所変更になりました

横浜市港北区榎ヶ丘45-14

○熊井七郎 (都立工芸)

電話変更になりました

勤務先814-8755

自宅 338-6953

○小林正典 (丸三ツルヤ)

丸三ツルヤ インテリアデザイン展

9月12日から9月24日

9月25日から1カ月間 東京久米建築事務所出張

○佐々木英二 (石川島播磨重工業)

住居表示により変更になりました

横浜市港北区桜台40番地

桜台団地635号

○鈴木暁 (創建社)

住所が変更になりました

大田区西蒲田8丁目17番1号

三葉荘 201号

○鈴木富久治 (フリー)

JFC出展メーカーについて広島・九州・東京のメーカーを巡りました。

○田中聰行 (フリー)

城南信用金庫生田支店家具デザイン

JFC出品 (東洋工芸KKのダイニングセットデザイン完了)

電話変更になりました

TEL 400-4253

○長大作 (坂倉準三建築研究所)

熊本城のすぐ前に熊本県医師会館を建設する準備で連日連夜強行軍の最中

○中井太郎 (フリー)

著作あすの住まいインテリアデザイン (ベターライフ10月発刊)

○中村圭介 (フリー)

著作中華料理・天華 (商店建築10月掲載)

新宿とんかつ かつ亭設計

新宿東口武蔵野館通り陸橋寄りです
のでご利用下さい

横浜センタービル

12階建ショッピングビルの総合計画
共通部分の設計管理を会員の竹内篤
鈴木暁両氏の協力により進行中11月
3日開店

リコー本社役員室日本信販信用部など
設計中

○豊口克平（フリー）

昨年完成の機械振興会館のための家具
13種ほど、寿など天童のSMとして近く
発売

モントリオール万博へ2週間視察旅行
手がけた「さくら丸」入港中でした

○中村昇（日家工芸）

北日本中小企業展出品物製作中

住所移動 北海道千歳郡恵庭町中島松
434

○広田長治郎（フリー）

7月末小浜邸完成東小金井木造32坪

○藤原庸弘（三重大学）

鈴鹿サーキット水上パララ設計中
学部名称変更 三重大学教育学部
所属変更 技術科木材加工研究室
伊勢市小保町公民舎官設計中

○本多正枝（大丸）

木材資源推進本部主催「アルミと木材
家具デザインコンテスト」収納家具入
選しました

○箕原正（フリー）

北海道共済ビル壁面レリーフおよびイ
ンテリア完成

○山口勇次郎（フリー）

事務所の面話局番が変更になりました
（旧408）新407-0486

○山本ヒカル（コスガ）

9月1日より住所表示変更

大田区東矢口1-7-20

○吉永淳（産工試）

著作 学研社発行、現代ホーム百科辞
典10巻・生活と科学編に「庭とテラス
の家具」・家の光8月号に「新しい家
具のデザインと選び方」・造形ニュー
ス78・79号に「プラスチックと家具」
を執筆しました

○大和勝太郎（フリー）

事務所の電話局番が変更になりました
（旧402）新400-5582

○渡辺 力（Qデザイナーズ）

自宅の住所が住居表示により変更いた
しました

港区六本木6-10-4403

○村松洋雄（高島屋）

京都西陣ボーリングセンターインテリ
ア基本設計

元町ユニオンストア店内ディスプレイ
岡本邸応接室食堂玄関ホールインテリ
アデザイン

勤務先移動 生和木材工業KKから横
浜高島屋設計室に勤務

TEL (045) 311-1251

○三宅正郎（フリー）

9月22日中小企業振興事業団主催によ

る経営指導員研修講座に商業建築の講
義担当

○拓植厳吉（ノバ工芸KK）

中央区八重洲5-5

半年～1年東京出張、連絡先自宅

（京都市左京区下鴨南芝町4-1）

○並川拓史（フリー）

・JFC家具設計完了（古川工業）

・67年度Gマーク2点選定

（ロールチェア古川工業市販品）

・量産家具研究試作

・輸出用雑貨品検討中

○福岡喜久雄（高島屋大阪支店）

モントリオール万博見学

○児玉潤吉（倉敷紡績）

Gマーク選定カーテン地2点の認定を
受けました

○常持 敦（大丸木工工務部）

6月16日～7月10日まで米国出張

○西野 実（筒井木工設計部）

病気療養中

○樋口 治（高島屋大阪支店）

5月～6月末モントリオール、USA
メキシコ視察

○西田秀雄（高島屋大阪支店）

胃潰瘍のため通院療養中

○木村慎一（日立造船エンジニアリン
グ設計部）

勤務先所属名変更

日立造船エンジニアリングKK第3

設計部船舶設計課

■賛助会員紹介

この欄は、賛助会員の紹介欄として
毎号2社分のスペースを取ってありま
す。

新商品の紹介、社の動きを会員の方
々にも良く知っていただくためにも絶
好の機会だと思います。

自由にご利用下さい。

掲載の形体は30号・31号を参考にし
て下さい。

なお、詳しく知りたい方は当協会、
広報部会か事務局までおたずね下さ
い。

広報部会

- 防火性・防塵性に優れたファイバークラスカーテン
- 強靱な山羊の毛を使用し、耐久力に優れているウェスト
ミンスターカーペット

セルコンでは常に新しい素材を追求し明日を創るインテリ
アを目指し 日夜研究開発に努力を続けております。

空間イメージの形象化に役立つ インテリア製品の数々を
セルコンインテリアアートセンターで御覧下さい。

近藤忠商事株式会社

本店 神戸市生田区加納町2ノ30

TEL大代表 (23) 4321

東京支店 東京都千代田区内神田1-13-12

TEL大代表 (293) 5351

名古屋支店 名古屋市西区児玉町1-50 TEL(521)3236-9

札幌事務所 札幌市南一条西七丁目興和ビル

TEL (25) 7955

新入会員紹介

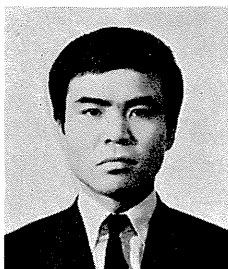
「仕事は堅実的であると共に個々の作品を取ってもまとまっているし、室内空間としてもつかめている」と語られています。

現住所 千葉県柏市豊四季団地

90-506

勤務先 (株)松坂屋東京家具装飾部
室内設計室

TEL 891-0948



正会員(東京) 秋山 修治

(昭和16年6月28日生)

新潟県立高田工業高等学校・木材工芸科を35年卒業後、(株)松坂屋室内設計室に勤められ現在に至っている。一方41年3月桑沢デザイン研究所インテリア住宅科を卒業されています。

また、提出作品として、自民党会館の椅子や松坂屋家具サロン出品作品の写真が8点提出された。

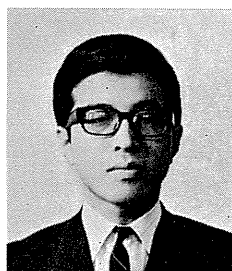
推薦者の泉修二・中村圭介氏は「積極的に量産家具設計を進めており、若年ながらオリジナルなものを作りあげようとする努力を評価し将来が楽しみです」と語っておられます。

現住所 台東区池の端 2-1-38

TEL 821-4878 (呼)

勤務先 (株)松坂屋東京家具装飾部
室内設計室

TEL 891-0948



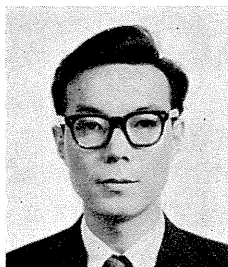
正会員(東京) 牧野 達夫

(昭和16年8月11日生)

新潟県立高田工業高等学校・木材工芸科を35年卒業され、(株)松坂屋室内設計室に勤められ現在に至る。

提出作品は自民党会館の家具や松坂屋家具サロン出品作品の写真6点が提出された。

推薦者である泉修二、中村圭介氏は、



正会員(東京) 永原 浄

(昭和7年8月26日生)

昭和32年3月日本大学芸術学部美術学科を卒業され山田照明株式会社においてチーフデザイナーとして活躍され昭和39年には永原 浄デザイン研究所

を自営し現在に至る。

また、パレスサイドビルのアラスカや三笠会館などの照明器具デザインが5点提出された。

推薦者の長大作氏は「インテリアデザインの中で照明器具の占める位置は非常に重要であり、この照明の仕事に真向から取り組んでいる人は我国では少く、永原氏は良い仕事をしているし貴重な存在である」

一方、大和勝太郎氏は「日本では全く新しい分野のパイオニアとして、またインテリアデザインのあり方について長い間、研究してこられたことに感服する」とのべられています。

現住所 板橋区成増町 93-3

TEL 939-2592

勤務先 同上

準会員(東京) 青島 国男

(昭和17年10月6日生)

育英工業高等学校木材工芸科を36年卒業後、荒川家具株式会社に入社しそのかわら桑沢デザイン研究所においてインテリア住宅を修めました。

推薦者の狩野雄一氏は「荒川家具株式会社の開発部に所属して量産の既製家具のデザイン計画にあたり、家具デザインのプロダクトの追求に専念、新しいタイプの家具設計者です」と申されています。

現住所 埼玉県北足立郡新座町

大字片山字栗原 1109

勤務先 荒川家具株式会社

TEL (842) 0261

準会員(東京) 小林 隆志

(昭和17年4月28日生)

育英工業高等学校木材工芸科を36年卒業後、株式会社三日月に入社しそのかわら桑沢デザイン研究所においてインテリア住宅を修めました。

推薦者の狩野雄一氏は「勤務会社の関係で美術館の家具設備、室内設備や様式家具に特別な才能を持ち、今後その意味での生長が期待される珍しいデザイナーです」と申されています。

現住所 新宿区西落合2-24-2

TEL (951) 6286

勤務先 株式会社三日月

TEL (211) 6080

67日本輸出デザイン展を見て

今回のGマークは、大分審査基準を下げたのではないと思われる。

その一例を上げると、木製キャビネットのテレビおよびステレオが、従来よりぐんと多くなっているが、それはデザインが、余りよくないものまで入っているためだろうと思われる。

ビクターのテレビ19T-T60（モダンなデザインでよくまとめている）や、新日本電気のテレビ19-D10および、東芝のテレビ19-FC（ZのZ製品は、日本調でうまくまとめている）のように可成り水準の高いものから、ビクタ

ーのステレオ STL-760Mのように、これがグッドデザインかと疑われるようなものまで選定されている。

外にも欠点のあるものを二三上げる

と、
コロンビアのステレオ DSC-675 Fは、金線を入れているために安っぽくしてしまっているし、日立のカラーテレビCN-92Sは、箱部と台の色を同じ色にするつもりなのに色が違ってしまったのか、あるいは色違いにしたのかわからないが、いずれにしても色の調和がとれていない。

トリオのステレオ SC-550は、台輪が引込み過ぎているため、箱部と台輪の調和が取れていない。また、色違

いにしているが配色がよくない。

しかし、水準が下がったとはいえ、やはりかなり水準が高いものも多かった。松下の自転車サイクラーB100 IRは、黒のつや消しとアルミの白色アルマイトの色でまとめており、上品で、実に神経の行き届いたデザインである。

12年振りにモデルチェンジした東芝の電気釜RC-8LHは、さすが電気釜の元祖だけあって、優雅なよいデザインである。

装束のレースカーテンMC 100は、柄、色共に非常に良かった。

イスの寿商店

浜田香苗

自動車のデザイン展を見て

JETRO がトヨタと日産、この龐大な自動車会社の機構の中から抜き出してスタイリング・デパートメントの一端を展示させた事は、恐らくこれが初めてのケースでありその意味では手際のいい企画であったと讃えたい。またこれらのライヴァル会社が各々その自社の考え方や特長のある科学的なデザイン・プロセスの進め方やアドヴァンス・スタイリングの追求をモデルや、写真を用いて説かれてはいたが欲をいえばもう少しレヴェルを下げて、学生諸君にも噛んで含める態度が欲しかった。そこで私なりに私共インテリアデザイナーの室内設計とこれら自動車のボディ・スタイリングやデザインのそれぞれのプロセスのうち主だった違いを取りあげて私見を述べてみることにした。

元来、インテリアデザイナーの室内設計では椅子張地、カーテン地、カーペット、壁張材などは、ほとんどお仕着せの市販品の撰択と組合せでイメージの完成を期している。椅子、テーブルも特別な場合や量産品を除けば試作品は作らない。成型の途中で所謂、機に臨んで即座に湧き出るアイディアで纏めることも殊更必要で、頭脳の体的訓練も重ねておかなければならない。線図（ラインズ）を使わないで椅子類の曲面構成は同一の工作図を用いてもデザイナーと工人とのコンビが異なる毎に多種多様の成型が考えられる。このことはまたデザイナーの経験とそ

の才能に多分の成否の要素がかかって来るといえ、この辺にも仲々面白味があると考えられる。

椅子張地でも壁張材でも市販品とはいっても何れはこれらの企画をしたプランナーやデザイナーもいる訳であるから、週ればインテリア・デザイナーはこの人々からの協力なしではその考えておられるイメージの完成は覚付かない、裏返せばインテリア・デザイナーは未知のこれらエキスパートの存在を考えない訳には行かないともいえる。

ところが、自動車では何でも彼でも試作の上検討、チェックで、たとえば織物や外板塗色の場合は調色につぐ調色で検討を重ねる。機能部品でデザインを要するもの、例えば車室内の計器板、ステアリング・ハンドル、ドア・ハンドルレギュレーター・ハンドル、サンヴィザーや灰皿の類に至るまでそれ等の元来あるべき正規の位置に取付けて、形状、デザインに併せて操作性、機能のチェックをする。外板の塗色は屋外で塗装外板曲面の色相、光沢の比較検討をするし、椅子張地も最終的には試作車内でウィンドウ・ガラスを透過する陽光と車室内の各部品の反射によって醸成される色相変化と同時に外板塗色との競合の有無が確められる。

更にボディ・スタイリングになると微妙な曲面の変化は目の位置の高下に応じて千変万化、特にフロント・ウィンドウやリヤ・ウィンドウ、フロント・グリル・アーチ、タイヤ切欠などのオープニングの孤形に予測のできな

った歪形が現はれたり、緩やかなルーフ形状であるはずのものが変形を見せることもある。

この事は実物大のモデル・チェックが絶対に欠かせぬものであることをうなづかせるが、商標、エンブレム初め凡そどんなものでも実物大の生産型、織物でいえばそのテキスチャそのままの試作品を作って確認をしなければならぬとすることはリスクの予防ではあるが、現在スタイリストを旨とする人々にとってはこの世界でのその職分が益々専門的分化の傾向から、歯車の一歯の様なエキスパートとはなっても、ややもすると総合的なスタディのチャンスに恵まれないので、多くはカー・ボディ・スタイリストとしての正夢を期しがたいうらみがある。

これら、ボディ・スタイリングと室内設計との製作過程での大きな違いの間にあって、唯一つ、イタリアの一品製作のボディ・スタイリング・プロセスのみは全く個人プレーであり、インテリア・デザイナーの物する家具成型と軌を一つにするもので、いづれもスタイリストデザイナーオリジナルの才能を余すところなく発揮でき、アルティメットの要素が大部分であるところがうかがわれて面白い。

井下 猛

J. F. C 開 館 さ れ る

J. F. C と J. I. D の 協 力 に つ い て

デンマークより遅れること 30 有余年、私はここでデザインの上での遅れを云々するつもりはない。

デンマークのボーゲ・ヤンセン教授が来日し、その公開講演会は、数々の日本の家具業界への忠告で満たされていた。それは今から 7、8 年も前のことである。

日本の家具工業の将来についての質問に対して、彼は「この間いにはお答えすべきではないと存じます。これに関連した話として、デンマークはやろうとしてから 25 年以上の年月がかかっております。これは決して 1 年や 2 年でできるものではなく、長い年月を要するものであります。日本の現在の状態を変更しようとするからには、それだけの日数がかかると思います。

また、そのようなことは一人でできるものではありません。より多くの人が、より多くの団体が一つの方向に対して一致団結してこそできることだと思います。……」といっている。

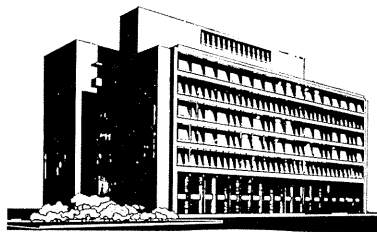
J F C が漸くここに完成して、日本における家具として、はじめての全国的スケールの拠点ができ、その開館を期しての特別展示が、J F C とわれわれの協会有志の協力によって持たれたこと。そこに彼ヤンセン教授とともにその大きな社会的な意義を見出すもの

である。そういった幾つかの団体が、真剣に取り組んでやろうとし、ここまで漕ぎつけた両協会の努力は大いなる社会的な前進であろう。

及ばずながら、小生もかつては各産地で、あるいは紙上で彼ヤンセン氏の言葉を機会あるごとに叫びつづけてきた。

同じことばかりいうのも芸がなく、内にこもって、半ばあきらめの心境であっただけに、今回の企画に対する期待は人に倍するものがある。

日本の家具メーカーも漸く新しい



時代の息吹に目覚めたわけである。しかし、慧星のように世界を風びしたデーニシュ・デザインは今から数えれば 30 有余年のデンマーク業界とデザイナーの貴重な団結と努力の結晶であることを今更のように想起すべきである。

30 有余年のハンディーがあるとはいえ、現在の日本の実力をもってし、同時に各位がその重要性を意識して努力をすれば、決して遅きに失するということはない。

むしろ問題は、この企てがこれだけに終ることなく、将来に向かって永く続

けられることによって、世界への道も開かれる。願はくは、そうあって欲しい、また、そのスタートであるとしたい。

内容分析と格差の是正へ

今回の J E C の特別展への参加計画は 3 月末からスタートした。様々の計画は両者から委員を出し、これに建築家として山口文象氏東工大の清家清氏京都大の増田支也氏を加えて、指導、実行両委員共々一丸となって推進することになった。

試作中の各メーカーの作品検分もそれぞれの委員が手分けして全国を大きく 4 ブロックに分けて個々のメーカーを歴訪したわけである。

手許にある資料を整理すれば
メーカー出品希望社……………38 社
時前に出品中止した社……………4 社
出品を拒否された社……………6 社

(内 2 社は半数を撤去)

実際に出品した社……………30 社
一方デザインサイドは

外部デザイナー希望数 22 名(会員のみのみ)
コンタクトしたデザイナー数 13 名(会員のみのみ)

会員外デザイナー利用数……………6 社

デザイナーについてはメーカーサイドよりの指名があれば優先とし、地理的關係や、フリーや否か連絡や監理上の都合を勘案して両者の結び付きを専門委員が行なった。その結果 9 名の方が不縁に終わった。

月 例 会 報 告

J. F. C (ジャパン・ファニチャー・センター)の開館にともない、9 月 18 日、当協会協力になる 1、2 F ショールームを中心に見学会を行った。また当日夕刻より J F C 役員を含む業界の人々と「家具業界の現状と将来について」と題して懇談会を持った。会館地下食堂一杯の参加者で終止熱心な討議が行なわれ非常に盛会であった。

懇談会の議長にたたれた山口月例会委員長より上記テーマの説明およびについての紹介、辻理事長、東畑専務(いずれも J F C)のセンター設立と特別展示会の経過報告が行なわれた。

続いて J I D の出品者、製作者を中心に発会活発化していった。当日の発会内容を概略分類してみると次のようになる。

① J F C 設立と特別展示会の意義

J F C の設立が過去の孤立したメーカーや卸業者を家具業界の中枢機関として結びつけるばかりでなく、デザイナーやアーキテクトとの密接な交流を作り出す場としての意味も極めて大きいのではないかと。特に開館に際しての特別展示会における J F C と当協会の協力は今後の家具業界に良い刺激を与えたと思われる。メーカー、デザイナー、販売店が互い協力して、良い家具と消費者を結びつけるべくこそ明日の家具業界を期待できる。過去におい

てはメーカーとデザイナーとは単に消費者を媒体とした極めて弱いつながりでしかなかったが、商品企画の時点から協力し得る機会を個人の企業としてでなく、職能集団としての結びつきの上で持てたことは大きな意義がある。

今回の出品作品にはデザイナーの側にもまた製作者側にもそれぞれの問題はあつたが、家具業界の発展という観点から考えるときそれらは徐々に改善されていくであろう。J F C の意義の把握と各々の職能における業界への自覚が今後の発展につながっているのではないだろうか。

② デザイナーとメーカー

家具産業がメーカーだけを指すものではないように、デザイナーだけで成

総合的に出品作を会員と非会員のデザインおよび企業内デザイナーの作品と3つのグループに分けることができる。その中、会員デザイナーで半分撤去されたもの2、会員がデザイナーの1、企業内デザイナーのもの3という数字の示す通りのレベルともいえる。

メーカーとデザイナーの商品企画に対するコミュニケーションの不足とその態度の甘さ、協働力の不足、といったものを痛感する。勿論時間的な不足や、試作検討の余裕の無さなど事情は沢山あるであろうが……全体としては、会員の作品に対するにメーカー自身のデザインの距差を今後如何に埋めるかということが次回からの大きな課題になるであろう。

この展示会には終りが無い

会員諸兄は契約をローヤリティーベースで行なっているはずである。ローヤリティーは生産が続く限り支払われる性格のものであり、その意匠権も継続される。その間、デザインに対しても時間的不足を今後においてカバーしていただきたいと思う。

またデザイン、フィーの件でもいまだ終ってはいないだろうし、今後における様々なトラブルが予想される。その意味においても少なくとも両委員会は解散することなく今後の紛争処理委員会的役割りまで果すべきではなかろうか。それらの問題が総べて終わったと仮定しても会員デザイナーとしては、折角、生れた寄縁というか、協会によって結ばれた見合が立派に結婚し有能な子孫の誕生がしかつ、育成してゆく

のは、むしろ今後に在ると思われる。その意義を充分今後に生かすべく相互に努力されることを期待したい。

聞くとところによると、会員のデザイナーの多くがある特定のステージのデザインと取組むことが多く、最初からメーカーと結んで、量産を前提としたケースに恵まれることが殆んど少ないと聞く、非常によいチャンスであるわけである。而して、一層この機会を生かして、各々の作品の洗練度を加え、将来への大きな足掛りとしてやがては、日本の家具が世界への道に通ずる有力な突破口になるであろうと信ずるものである。 鉄木富久治

● J. F. C 出品について

中井太一郎

高度に近代化した文化国家日本、その住まいの盲点は吾々の寝かたでしょう。

今だに原始生活あるいはキャンピング同様、床上でのごろ寝です。住居スペースの制限がネックですが、通産省調べのベッド普及率は2~3%にすぎません。家具部門では最大の未開発ジャンルです。ベッド業界はもともと布団商社から洋式化したもののようです。たまたま蒲団皮あるいはラシャメン調のマットレスを見かけギョッとすることがあります。インテリアを総合的にまとめるべき家具メンバーになり切らず、ハリウッドスタイル、アーリーアメリカンなど全くふしぎに孤立したデザインで烈しい価額競争のみに明け暮れているのが現状のようです。大切

な睡眠の家具として、生活にすなおに溶け込める格調高いものにしたいものです。たまたま防衛庁のベッド、寝具の規格委員長を全日本ベッド工業会顧問としてこの一年足らずやられ、協力願った千葉大の小原研究室の人間工学の大研究や、狩野教授の資料などにも接し、その本質的な機態とともに家具らしいベッドを目標にデザインしてた

① ベッド. S. W1314×L1990×H760mm

ノックダウン方式、床材はダブルクッションをさげ、パンチングハードボード、ヘッドボードは両面フラッシュ、ひっくり返して左右どちらにもナイトテーブル取付可能、マットレスは既製表皮をさげ、他部門(川島織物のドレープ地)から自由に選定。

② ドレッシング セット

チェスト W750×D450×H180

ドレッシングユニット

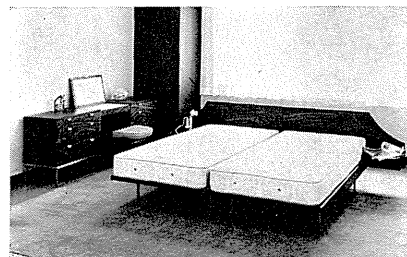
W600×D450×H180

中央ドレッシングユニットは両側チェストに引掛け式、他一種はトップボードのみオフホワイト デコラ貼り。

③ スツール W460×D360×H440

座は成型合板、ヘヤーロック、フォームラバーパッキング。

以上木部は総てローズウッド板目、オイルフィニッシュ仕上げ、脚部は角および丸鋼管木ホワイトブロンズメッキ



デザイン 中井太一郎 制作 東京ベッ製造(株)

立するものでもないことは明白である。しかしおたがいの職能に対する理解がまだその距離感をなくす段階までに至っていないこともある側面では事実だろう。この理解のずれがメーカーかして「売れないものは良い商品ではない」という結論を引出し、デザイナーをして「業者はわれわれを理解しない」という嘆息をさせるのではないか。この時点では市場調査も新技術、新発想も何ら意味を持たない。両者間に離反した独善があるばかりである。この事項に関してだけいうならばあるいは「私達は一般小売業者など相手にはしていません。良い商品だから売のです」というハーマンミラーの自負を見るべきだし、自分の工房を持つデ

ンマークのデザイナーを見習うべきかも知れない。しかし問題はもっと大きなところに存在しているのではないか。家具産業は住生活に対する総合だといわれるが、メーカーとデザイナーの相互理解と勉強とがより一層必要とされる時点がきているのではないか。

③ 将来への展望

J F C設立の意義が冒頭に述べたように家具産業界の一本化された状態で流通の機構への参加であるならば、お互の職能に対する開発は直ちに将来の発展え結びついて行くだろう。販売手段の解決、商品と消費者と関係、企画と商品化の問題、道具と空間意識の問題などはたされねばならないことは山積していると思われる。しかしまた販

売店、メーカー、デザイナーの関係を一層強固にして行くための手段もより考えねばならないと思われる。そうすることが本当の意味での設立を将来への発展のための契機とし得るのではないだろうか。

上記の文章は懇談会の内容を編集委員が独断で簡略化したものです。この他にも特注品やローヤリティーの話もありましたが割愛しました。悪しからずご了承下さい。

ちなみに13日のJ F C開館日より懇談会当日の18日までの5日間の入場者は次の通りだそうです。建築家およびインテリアデザイナー1000名、メーカーおよび官庁関係4000名、販売店 10000名、

JFC特別展に出品して

JFC 開館記念特別展示会はJFCと当協会との協力のもとに進められ、今までにない新しい方向として非常に喜ばしいことである。

はっきりいってJFCが当協会の協力を得たのは、メーカー独自のデザインだけでは展示会としてサマにならないと考えたからとの声も耳にした。

ともすると経験のみで職人的な考えでもって行動するメーカーも多く、社外デザイナーは、なかなかタイアップして作業を進めていくことは難しいのが現状である。

当協会員諸氏も今回のJFCとの協力作業で、それを強く感じられた方もおられることと思われる。

私はメーカーで量産家具のデザインを担当しているものであるが、社内でさえ考え方の相異でのトラブルは常である。

また、今回の特別展示会に出品するため自社のデザインを担当したが、内部での考え方のトラブルもあり、JFCでの企画もあまり納得できぬまま試作品を展示するハメになってしまった。自分自身JFCを良く理解できなかった点もあったがJFCでの企画、その進め方、体勢、メーカーサイドの展示会への感心度など、かなり問題があったように思われる。

メーカーいわく、

とにかく出品すれば、社の宣伝にも

なるし、偉い先生に頼めば、何んか変わったものを書いてくれるだろう。

といったとか、いかなかったとか？

そういう中でメーカーサイドは当協会の協力をどう考えているのだろうか、いささか考えさせられる。

JFCで展示会企画を進める上で、大きく分け図面の検分、作品の検分があった訳だが、それ事態にも問題があったのではなからうか。

JFCでは、作品提出のために、文章で当初次のような三つの方向を示し、そのいずれかを選択しなければならなかった。

①今すぐ売れるもの

②来年売れるもの

③未来の家具

一見、非常に簡単な分方のように思われるが、非常に無責任ともいえる分方なのである。

その中で当社では①を選び、小生がデザインすることになったが、図面を提出したところ、新規性に欠けるということで、再提出ということになった「売れる」というものに対しては、ある程度自信を持っている私ではある。(しかしそれが、デザインの良し悪しには関係ない) というのも今までの量産家具の経験と市場の流れを良く知っているからである。

しかし検分を担当した諸氏は、①②③をどう考え、どうチェックしたのか良くわからないが、①②③に対して境界線を引くことは難しいことであり、また不可能に近いことではなからうか。

また、それを深く検討し押進めたところで展示会としてサマにならなかつたろうし、最終的には形のみに迫られたようだ。

そのへんにも指導・実行委員の中でもJFC側とデザイナー側との意見の相異もみられる。そういう抽象的なJFCからの文章に泣かされると共に、あまりにも職人的な企画の進め方に腹がたつばかりだった。

結果として、あういう展示会であったが内容的にも乏しいものだったし、あの展示会を見た限りでは、展示会テーマである「くらしとしつらい」は、あまりにも大きすぎる感がある。

売れる家具はいいデザインであると豪語するメーカーサイド。それには何時も泣かされる吾々である。価格競争のみに走っているこの業界。坐っていて売れていく家具なんて、そう簡単に生れてくるものでもないし、そういう考え方を是正させるためにも、当協会と業界との結びつきということももっと考えなければならないし、対外PRなども慎重に検討しなければならないだろう。

その外、種々の問題はあったがその中でも、デザイン料について密度な規定があればと思った。吾々のように当協会のメンバーでメーカーに所属していた人間もいることですし、そういう大きな企画においては、何んか方法があるようにも思われる。

サキガケ・デザイン室 高橋岩夫

前回数報30号において誤字・掲載もれなどあり、大変迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。
紙面をもって訂正致します。

- ・2P中段34行目の賛助会社711口が賛助会員7社11口の誤りです。
- ・〃右〃29行目の別理事長が副理事長の誤りです。
- ・4P左〃8行目の発行部数は最大10回が発行回数の誤りです。
- ・10P東京支部役員、資料の坂田種男と下の帯に大阪の飯田敏彦氏が掲載もれ。

編集後記

隔月発行のつもりが1カ月遅れて大変申しわけありません。企画を変えてからの2冊目、委員一同張切ってはいますが素人集団の悲しさ、写真、原稿、校正と追廻わされています。先号理事会の記事中2枚の写真がすべて東京側の顔になってしまったのは全くの失策。次回理事会の顔写真は埋合せのため大阪側の顔写真だけを掲載するこ

とに致しました。……というのではこれまた失礼。ここに深くお詫び致します。

ともあれ法人化、万博、会の組織作りと種々の問題を抱えている現在、会報の果す役割りの重要さは我々一同も痛感しています。会員諸氏によるお一層の御協力をお願い致します。

(泉 記)